女鑑

月二十四日發行

第百四號

東京國光社

女鑑第百四號

目錄

女鑑

女子と文學……一

論說

家庭教育の急要を論して廣く日本臣民たる女子に希望す(二)……雨後 翠江……六

女子教育一班(十三)……三輪田眞佐子……九

史談

伊賀の局……鶴井ふく子……一三

孝女さよ子感情父……岡部 讓……一六

家政

いけ花(十四)……田邊和氣子……一七

たちぬひ……西山たい子……一九

たいさころ……二〇

このころ……御柄義子……二二

このころの花……磯野かつ子……二二

學園

日本文典……鶴井正男……二二

額田女王の御歌……永石徳文……二六

漫錄

淚草……京極忠高女……二七

千代の春草……松竹居主人……三一

おきの玉藻(六)……永石徳文……三四

雛あそひ……森 幹三郎……三八

諺につきて(つゝき)……鶴井ふく子……四二

黑白の爭……住山幾子……四三

梅見……草の屋主人……四四

野寺の暮……石岡千亦……四六

落花(一)……柴田千稻……四八

時雨(その四)……白魚女史……五二

文林

歌……近衛忠凞……五八

仝……久我建通……五八

仝……東久世通禧……五八

仝……佐々木高行……五八

仝……高崎正風……五八

仝……勝 安芳……五八

仝……壬生基修……五八

仝……津輕承昭……五八

仝……前田利鬯……五九

仝……諏訪忠元……五九

仝……宮地嚴夫……五九

仝……鎌田正夫……五九

仝……飯田武郷……五九

仝……仝人……五九

仝……三浦千春……五九

仝……仝人……五九

仝……大畑弘國……五九

仝……仝人……五九

仝……熊谷 行……五九

仝……藤井行麿……六〇

仝……仝人……六〇

仝……岡部 譲……六〇

仝……仝人……六〇

仝……東宮鐵眞呂……六〇

仝……仝人……六〇

仝……永石徳文……六〇

仝……鍋島榮子……六〇

仝……松平健子……六〇

仝……柳原愛子……六〇

仝……千種任子……六一

仝……園 祥子……六一

仝……小池道子……六一

仝……北島以登子……六一

仝……三島竹子……六一

仝……服部磯子……六一

仝……田邊和氣子……六一

仝……仝人……六一

仝……久後鈴子……六一

仝……仝人……六一

仝……熊谷初子……六一

仝……仝人……六二

仝……内田ゆか子……六二

仝……海上篠子……六二

仝……師岡須賀子……六二

野若菜……三輪義方……六二

長歌并短歌……奥山照子……六二

雜報

仁孝天皇の五十年祭……六三

高齢恩賜……六三

故久邇宮殿下の御[illegible]……六三

故能久親王殿下百日祭……六三

御歌會御題……六三

天の橋立の變遷……六五

占守島海岸の產物……六五

醫師の治療の即治し得さる場……六六

合に傍人の行ふへき處置法……六七

精神病者を看護するもの丶心得……六八

女子高等師範學校入學試驗問題……七〇

飛鳥の浮力……七〇

段通職工の教育……七〇

大日本婦人教育會常集會……七一

東京府高等女學校……七一

女文學者若松賤子逝く……七二

外國語の轉訛(つゝき)……七二

敎の庭

兼題 歌數百首 文數十章 其他數々……

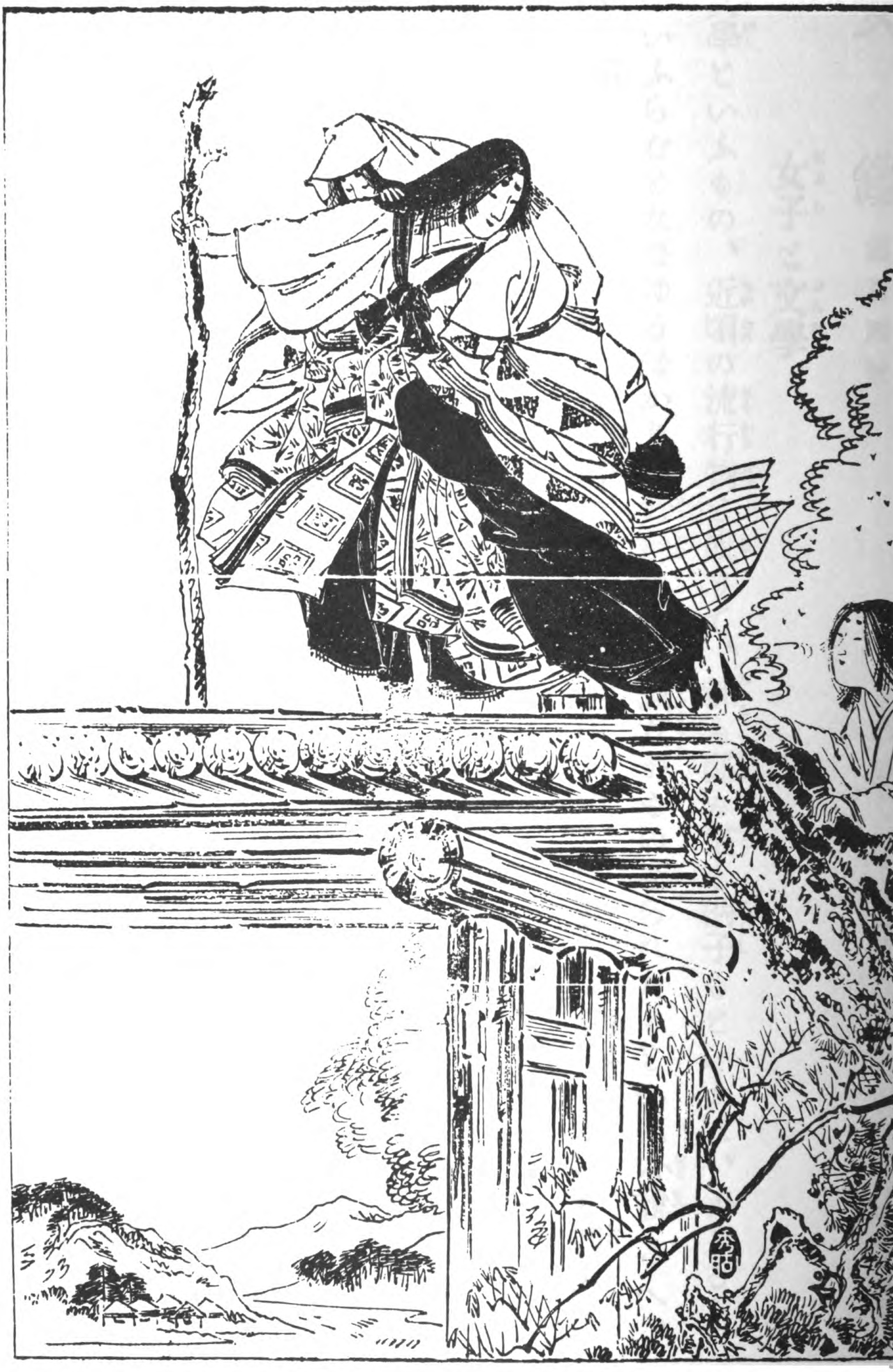
附錄

りちく物語(つゝき)……道晃親王著

口繪……永峰秀湖

插畫……高橋松亭

伊賀の局



女子と文學

文學といふもの、近頃の流行物と成りて、都も鄙も猫も杓子もといふは、かゝるをやいふらむとおぼゆるばかり。妙齢の令孃淑女がものせられたりといふ小說さへ、いと高らかに名乘られて賣り出ださるゝに至れり。これ吾人が双手をあげて迎ふべきものなりや。

文學といふものは、世の經濟學者にきけば、不生產的のものとていやしみ去れど、なか〳〵に、人間の生存上に社會の成立上に、文學こそ極めて必要なるものなれ。一日も欠くべからざるものなり。文學は、人間をあはれにやさしう優美ならしむるものなり。社會をあはれにやさしう優美ならしむるものなり。文學を愛し文學に志すといふことは、ともあれかくまれ、文學の味を解する力なき人は、そうじてものゝあはれを知らず、極めて、こはく、荒く、つれなく、下等なるものなり。社會も然り。文學といふものゝ無き社會、文學といふものゝ味を解せざる社會は、極めて

荒く、卑しく、下等なるものなり。これありて、人間いよ〳〵うるはしく進み、社會ます〳〵うるはしう進歩するなり。されば又、人間をうるはしう進ましめ社會をうるはしう進ましむる力を有せざるものは、眞の文學に非ざるべし。文學にあらざるべし。いな文學にあらざるなり。いかなればといふに、文學は人をよろこばしめ樂ましめ、社會をよろこばしめ樂ましむるが間に、何時となく、何處となく、何となく、人をいよ〳〵靈妙に導き、社會をます〳〵美たる優たる域に進ましむるものなり。これ吾人が文學とする所のものなり。吾人が文學の定義なり。吾人が文學觀なり。されば此の力なきもの、さる性質を具へざるものは、吾人の文學にあらざるなり。文學にあらずといふなり。彼の卑劣醜陋にして人間に社會に道德を紊し、人間に社會に秩序を亂し、人間に社會に品位を下落せしむる如き卑説醜文は、人間に社會に文學とすべきものにあらず、文學といふべきものにあらず、文學に非ざるなり。これ吾人が文學の定義なり。また社會一般文學の定義たることを疑はざる所なり。

文學や、實に斯の如き性質勢力を具へたるものなり。而して其の勢力の人間を社會

を刺擊するは內部より裏面より底より刺擊するなれば、表面に外部に顯はれず。故に其の力たるや、又、思ひの外に强大なり。故に又、極めて危險なるものなり。すべて、物は有功のものは、又有害にして、其の効益の大なるものは、其の害毒も又大なり。例へば金銀を見よ。便益一日も欠くべからざるものながら、これによりて身もほろぼし社會も破ることあり。又飲食を思へ。必要しばらくも無かるべからざるものながら、これによりて生命を破るものあるにあらずや。學問智識もまた効益無邊のものながら、これによりて人をあやまり社會をあやまることあるにあらずや武道武器は人間を守り社會を守るものながら、これによりて人をそこね社會を破ることあり。ものは總うじて一利一害一得一失なり。而して、利の大なるものは害も大なり。最必要なるものは最危險なり。文學も又然らずやは。

吾人は、文學を以て斯の如く靈妙なるものとす。故に又斯の如く危險なるものとす。實に吾人は、文學を以て、かばかり人間に社會に最愛すべきものとす。故にまた最恐るべきものとす。恐れざるべからざるものとす。

女子と文學との關係如何。文學は女子に極めて必要なるものなり。又、文學は女子

に極めて適當したるものなり。何が故に適當せるか。何が故に必要なるか。吾人もとよりむづかしき理屈をいはざるなり。否、むづかしき理屈を要せざるなり。女子たる性質、女子たる本分を一顧一慮せば、さて、事は明かならむ。

女子は、日本の女子は、藹々たる和氣と優々たる風姿とを以て、その性質とし、その本分とせざるべからず。この和氣、此の風姿なくしては、かしこき父母の膝下に仕へて、やさしき日本女子たる能はず。一歩進みて、深き閨門に侍りて、うるはしき妻女たる能はざるべし。更に進みて、温き家庭に立ちて、かしこき母たる事能はざらむ。さては有り難き　天皇陛下の臣民となりて、うつくしき臣民たる能はざるなり。さすれば、遂に日本女子たる能はざるなり。

而して、文學は、もと優美靈妙なるものにして、此の和氣此の風姿を破るべきものに非ず。なか〳〵に、此の和氣此の風姿を養成する力を有せるものなり。故に、極めて女子に適當し、また極めて女子に必要といふ。かくて女子の性質女子の本分を傷くることなく養ふが如くなればなり。これかねてより吾人も女子の文學を嫌はず女子の文學を解するを欲したる所以にこそ。

されど、文學の性質たる、斯の如く大効大害あるものにして、極めて頼むべく極めて恐るべく、極めて愛すべく、極めて憎むべきものなれば、極めて謹まざるべからざるなり。文學の効ありて文學の害なきものを擇ばざるべからずあさましきあくたれ御轉婆蓮葉娘の暴言魔行をうつし、いやしき野郎野娼の妖言亂行を畫きたるごとき小説は、これ遂にやさしき日本女子となり、正しき日本婦人たり、賢き日本慈母たらんとする者が、膝下に閨中に家庭に繙きて、よく害なきものなりや、効あるものなりや。吾人は首肯する能はざるなり。而して、自ら父母の膝下に、良人の側に、兒童の家庭に、自ら筆を取りて、かゝるものを畫くに至りては、吾人實にこれを賛する能はず。否、かゝる者あらば、更に其の素行素意其の平生を危ぶまざるを得ざるなり嗚呼。

論説

家庭教育の急要を論じて廣く日本臣民たる女子に希望す（二）

雨後翠江

子供を教育するには、其の感情に訴へ、其の感情の自らこれに動き、これに趣き、これに習ふやうなる感情的教育ともいふべき道に依らざるべからざることは、前號に論じたり。而して、此の感情的教育には、家庭の教育が最適せるもの丶如し。

家族といふものは、元來一個の團體にして、極めてやさしく美しく靈妙なる感情を以て引き結ぼれたる團體なり。父子の愛、夫婦の愛、兄弟の愛といふ美妙なる情緒を以て引き結ぼれ、藹々たる和氣を以て包まれたるものなり。彼の猥りに理論を説く人は、とかく此等の愛を、弱き者をあはれむ故とやらむ、强き者を恐るる故とやらむ、あやしき理屈、しかも下等なる理屈を以て猥りに説き去らむと爲す人あれど、もと此等の愛は、理論的のものにあらず、理論を以て成立せるものにあらず、智識的のものにあらず、智を以て發明せらるゝものに非ず。さるはかなく賴みがたきものにあらざるなり。これ等の愛たるや、理性的のものより、むしろ感情的のものなり。發明的のものよりは、むしろ固有的のものなり。人と生れて先天的に固有せるものなり。人たるもの丶天性也。子にして親を愛し親を慕ひ親を尊むは、人の天性なれど、親として子を愛し子をあはれみ子を慕ふも、又人の天性なり。世に此の父子の道に反ける如き人あるは、さる者は此の天性を失ひたる人のみ。もとより此の愛を有たずに生れたる人

に非ず、何ものにか迷はされて、此の愛を失ひたるのみ。されど、其の迷夢を出でゝ彼岸に達せんとする時に臨むや、大かた人の言はよきにこそ。父子夫婦兄弟、家族の愛は實に靈妙なるものなり。此の靈妙なる愛情の中に坐して、導きも習ひも爲すにしあれど、家庭の敎訓といふものは、いかばかりか小兒の感情を動かすならむ。實に子供の感情に訴へ。子供の感情を動かし、子供の感情を支配する力は、又靈妙といふばかりならむ。且つ學校は稽古所なり學問所なりといふやうになり、これにゆくは稽古しにゆくなり。こゝにきくは稽古としてきゝ、學問としてきくやうなれど、學校の敎育は理論的のものとなりて、專ら感情的ならず。故に、子供を敎訓する力や薄弱なり。家庭の敎訓に比べては、實に薄弱なり。(わが此處に敎訓といふは、百般の學藝の敎へをいふに非ず、普通の人たる道德の敎訓をいふなり。家庭の敎育は元來此處に在るなり。)此の薄弱なる學校敎育に、兒童の敎訓をうちまかしたるのみにては、まことに頼むべからず、心安からず、いな心なき限りといふべし。これわが家庭敎育の急要を論ずる第二の主意なり。

第三には、人を敎育する場所は、もとより種々あるべけれども、うちまかせていふ時は、家庭の外に、なほ社會と學校との二種なり。社會の敎育といふは、社會の風俗習慣や社會の思想嗜好が人心を支配し人心を誘導し、また、彼れと是れと此方と彼方と相交通する間に、自ら彼れに習ひ此れに敎へられ彼方に誘はれ此方に導かるゝあるをいふなり。これ、やがて社會が人を敎育するなり。社會の思潮嗜好や社會の風俗習慣が、人を敎導誘引する事は、新しう此處に述べざるも、諸孃の既に知ろしめす事ならんが、いま最近き一例を申さんに、彼の社會に流行といふものゝ絶えざる事を見られよ。流行といふことは、則ち人が社會に誘導

せらるゝなり。その他人の衣食住の上にも、思想の上にも嗜好の上にも、すべて人の生活の上に社會の嗜好思想風俗習慣の影響は實に著しきものなり。又、人が相交通する間に、これに教育せらるゝ事も、明かなることにして、さるが故に、よき友を擇ぶべしといひ、孟母も隣りをゑらぶに至れるにして、朱に交れば紅くなるといふ世の諺もやがて、此の交れば染み易きことを教へたるものなり。これ等は皆社會的教育なり。人が社會に教育せらるゝなり。社會が人を教育するなり。

學校といふものは、もとより單に人を教育するために設立存在せるものなれど、此の教育は、今更に喋々いはん要なし。

此の家庭學校社會の三教場の中にて、家庭は子供に最近き所なり。最直接せる所なり。最親しき所なり。子供の身を置く所なり。學校も社會も、やゝ遠くまた間接せる所のみ。故に家庭は中心にして、學校社會は端なり。家庭は本にして學校社會は末なり。故に又よく家庭の教育は本にして、學校社會の教育は末なり。家庭教育は幹の如く、學校社會の教育は枝の如し。家庭教育は能く社會教育を左右するものなり。家庭教育善く正しければ、社會の教場に立ちても、常に善く正しき方に導かれゆくものなり。即ち社會に立ちても交際場裡に在りても、よく正しき道にのみふみゆくものなり。學校教育も、また然り。家庭教育の正しくうるはしき者は、學校場裡の教育にも、また正しくうるはしく進むものなり。斯の如く、家庭教育は、人の教育の本なり。基礎なり。人たるの本を、基礎を置くものなり。これが故に、又家庭教育の必要を呼ばざるを得ず、人の爲めに。

習慣感情的教育、吾人教育の本、以上の三点が、ひねとわが家庭の教育の大切なるを知るべき点なり。吾

人か此處に、これを主張する旨趣なり。わが言拙くわが筆のびず、よく我意を盡くすを得ざりといへども、わが意の存せる所は、かつ〳〵了解したまへるならむ。而して、此の大切なる家庭に立ちて、此の大切なる教育場裡に立ちて、此の大切なる教育の擔任者となり、よく兒童を養ひ、兒童を教へ、兒童を憐み、よく此の家庭教育の美菓を結むしむる者は誰ぞや。誰が任ぞや。誰が分ぞや。わはれ大かたの諸孃、兒童の母たり母たるべき諸孃よ。もとより卿等が任なり。職分なり。否卿等にあらざれど能はざるなり。

悲しいかな人間社會。智識と道德と相伴はず。智識の進むがまゝに、道德はなか〳〵に退きゆき。今の社會の文明たるやもとより、智識的の文明にして、道德はいよ〳〵曖昧闇黑場裡に陷らむとし、社會の狀態形勢日に日に非にして、人は輕薄頻りに風を爲し、浮華淫りに俗を爲し、神州の質素朴直たる氣骨は、やうやく夷俗の間に埋められむとす、これ蓋し我國維新の一大改革にわひ、百般の事物の變遷につれ、家庭の教育も自ら紛亂せしによるものならむ。今やかしこくもかしこき大君が多年有り難き惠みの露によりて、大和島根の文物まさに大にはひ輝くべき時となれり。卿等必ず大に奮發して家庭の教育に注意したまふべき時ならずや。徒に區々たる衣食の美をときてやむべき時にあらざるべし。願くは女鑑愛讀の令孃淑女婦人たち、幸に一顧せよ。

女子教育一斑（十三）

三輪田眞佐

（人ははきひとの中にも人はなしひとになせ人）と實に人物は少きものなり、ろも〳〵に生るゝからは、ろが目的を知らでやはあろ　れぞころ古より人生を說きて、朝の露と觀じ、

は假の宿と念ずるものあれ、世人いふ女子は因縁深かりけん、夫より迂まれ子に離るゝなど、悲境に陷ること多きものから、わきて花の色の移ふを見て歎き、入相の鐘の音身にしみて、あはれなりとぞ。まことや女子は自然に感情深けれど、わが身のさまを千々に思ふなり。從ひてその品格に注意すること、男子に勝らんかし。しかるに人物少きは如何なるゆゑぞや。盖女子の多くは、浮世を男子のものとのみ思ひ、自分は悲境にのみ陷りて、涙の袖をしぼりつゝ、生涯を經へんものと定むめり。おのれ思ふに、人は男女を問はず、老幼を論せず、悉く社會の一人として、邦家の一民として、至誠と勤勉とを以て、玉の緒の絕ゆる限まで、人事を忘れざるものこそ、善良なる人といふべけれ。されば女子この浮世を以て、男子のみのものとな思ひそ、女子と共有のものと悟り、いそしみ勵みて、人事を倦まざるべからず。されど物みな順序あり、分限あり、必、これに逆ふべからず。故に女子は女子の天職を全するをよしとするなり。もし其の天職を守らざらんか、男女同權など忌はしきことを唱ふるものとならん。必竟過ぎたると、及ばざるとは、何れも人物たるを得ず。人物といふには、先女徳を具へざるべからず。もし女徳の全からざる女子は、如何ばかり文學に長け美術に妙に、將た厨の務さへ能くせんも、眞正の女子といふべからず。これに引き替へ、溫和に靜淑にあらんも、精神に一種の信向立たず。見識定らざる女子は、舅姑を安じ、兒女を育て、家政を主り、以て良人に內顧の患なからしむること能はざれば、亦決して人物といふに足らず。されば苟も人物といふには、有德有爲の女子にあらざれば不可なり

孟子曰ひけらく、仁なれば則ち榮え、不仁なれば則ち辱めらると、誠に人誰か內は心を安んじ、外は衆に

尊ぶることを望まざらんや。そは人生の最大なる快事なれどなり。去かれどもかゝる快事は、天濫に人に與へず。唯人物にのみ享けしむるものならむ。如何となれど、女徳ありてこゝろ內に顧みてやましきことなけれど、其の胸中春ならぬ日ものどけかるべけれ、亦其の心頼もしからむ、衆星の北辰にむかふが如く、期せずしてこれに歸依するもの多く、いと樂しかるべし。桃李ものいはねど、その下おのづから徑をなすとはかかる謂にや。

かゝる人物を養成するは如何にすべきか、これ究むべき問題なるらむ。さてそは讀書の方法によるべきか。元來文字に思想を表示する符號に過ぎざれど、これのみによるときは章句をつむを以て安ずるに至る。さりとて學校に委ねんか、今の學校は未精神を訓練する方法立ちしもの、少し、唯々生徒をして修學の高點を得るのみを勸めしむる如き傾きを生ずるなり。われは璧もし璧あらむには、磨かずして光なしと言はれんか、いかでかりか、怨まん。今日の如く女子の德教立たずして、人物少しといふも、女子のみの罪にあらじ。いでや次回よりおのれの理想及び經驗をものせん。

（水屋集）

きのふまで　ゆきをさそひし　あさこちの
ぬるむたもとに　はるたちにけり

けふさいへさ　なくしもさゝぬ　あまのこか
がさのまつしま　はるたちにけり



伊賀の局

墻井ふく子

つがの木のいやつぎ〳〵につぎませる人皇の九十六代にわたらせ給ふ　後村上天皇の女院、新侍賢門院と申奉るにつかへまつりし女房に、伊賀の局と聞えたるものなんありける。此人は男子にもまさりたる智勇兼備の女にして、力、あくまでも強く、しかも勤王の志深く、よく君につかへ、父の志をもつぎしものなり。その父なる人は、左中將新田義貞朝臣のさぶらひに、其人ありと聞えたる篠塚伊賀の守なりけり。此伊賀の守、義貞戰死の後、脇屋義助に從ひ居りしが、義助も亦病起りて墓なくなられしに、相順ふ官軍どもは、始皐沙丘に崩じて漢楚機に乘じ、孔明籌筆驛に死して吳魏便りを失ひたる思ひして、さながら暗夜にともし火を失ひたるにことならず、人々かなしみまどふ折から、足利方にては折こそよけれとて、細川頼春を大將として、伊豫、讃岐、阿波、淡路の勢七千餘騎を卒て、攻めよせたり。義助に從ひたる多年恩顧の者共、此處に死して君の御伴をぞつかまつらんとて、皆死力をつくして防ぎ戰ひしに、さしもの大勢も大にくづれ、頼春もわづかに一生を得て、漸くに伊豫へ逃れ歸りけるが、再び新手の勢一萬餘騎を引卒して、七手に分ちて城の四方をとり圍み、晝夜三十日がかり攻めたりしに、城中にては宗徒のいくさをもしつべきとたのみきつたる岡部出羽守の一族四十余人、皆さしちがへて自害なしぬ。その外の勇士共は、大方前度の戰に討死しぬ。殘りしものどもは、力もつき、食も乏しければ、皆氣を失ひて、大舘左馬助の主從十七騎は堺に着きたる敵力

百余人を遙なる麓へ追ひ下して一度に腹を切り、枕をならべて臥しぬ。防矢射ける兵共是を見て、今は何をか期すべきとて、或は敵と引組みて差違へて死し、或は已が役所に火を懸けて、猛火の底に死するもありて、今は生くるもの一人もあらじと思ふ折りから、篠塚一人は、大手の一二の木戸残りなく押しわけて、只一人ぞ立ちたりける。降人に出るかと見れど、さはなくて靜に冑を正し、甲の緒をしめなほして、四尺三寸の大太刀をはき、八尺あまりの金棒を脇に挿て、悠々と出でたち、大音を揚げて、我こそは畠山庄司次郎重忠六代の孫、武藏の國に生長して、新田殿にて一人當千の士とたのまれし篠塚伊賀守なりけり。心あらんものは討ちとりて勳功に預れと呼ばり〳〵、大勢うちかこみたる敵の中を、さながら人なきが如く、金棒をうちふり〳〵、駈けりありきしに、兼て音に聞えたる大力、しかもまのあたりの勇鋭なる樣を見て、敵は氣を失ひて、誰一人さへぎるものもあらず。篠塚馬にも乘らず、弓矢も持たず、しかも一人、何ほどの事かあらん。彼を遠矢に射殺せ、返し合せて駈なやまして討ちとめとの大將の號令に、二百餘騎跡に付きて、追ひかけ鏃をそろへて射れども、ひけども、篠塚は少しもさわがず、閑々と金棒をうちふりて、遂に六里の道を二百人の兵に送られて、今張の浦に着きぬ。舟にて逃れんとて、海中を見渡せしに、敵ののりすてたる船の數多ありけれど、悦びて浪の上五町ばかりを泳ぎて、その船にとびのりしに、水主ども驚きて、こは何ものぞと咎めけるに、是は宮方の落人、篠塚と云ふものなり。急ぎ吾を隱岐の島へ送れと云ひさま、碇を安々と引き上げ、四十五尋ありける檣を、かる〳〵とおしたて、屋形の内に高枕して臥したりける。水主梶取等之を見てわなゝき怖れて、云ふがまに〳〵、隱岐の島へ送りたりしと云ふ。

かゝる人の娘なれどにや、伊賀の局も、女子ながら、また物にあひて怖れず、どうせず。あはれめでたき女丈夫なり。そのつかへまつりたる女院の御住居は、皇居の西の方にて、山につゞける處なりしが、去ぬる正平のひのとのゐの年の春の頃、化物の出るとて、しかと形は見定めねど、心くるしくなりぬとて、人々さわぎのゝしるに、内裏より御とのゐ人あまた參らせ給ひて、ひきめなど射させ給ふほどに靜まりにけり。六月十日あまりの程、暑さに堪へかねて、此局庭に下りたちて、木立のひまに立ちやすらひし折りから、月のさし出でたるに秋の通ふ心地して、いとすゞしくおもふものから、

すゞしさを松ふく風に忘られて
袂にやどす夜半の月影

と、ひとり口ずさみながら、くるしさも忘すられて、なほたゝずみしに、松の梢のかなたより、からびたる聲して、たゞよく心しづかなれど、わが身もすゞしといふ古き詩の下句をいふに、あなをかし、松のひゞきにやと見あげたりしに、鬼の形したるもの、翼生ひて、眼まろらかに、月よりも光りたるが、とまりゐたり。勇ましき武士の心も消え失せぬべくおもふ程なるに、此局わなゝきもせず、うち笑ひて、誰ときく人もあらじと思ひしに、御身のそこにありてか、さるにても、如何なるものにか、まさかに松の魂魄とも思ひ侍らず、あやしう覺ゆれ、名告り候へと云ひしに、變化のものは、さもおそろしげなる口をしたゝかに開きしが、やがてわれは藤原の基遠と申す者なり。女院の御爲に命を奉り候ひけれど、せめてはおとをとはせ給はるべきに、それさへなければ、罪ふかくもかゝる形になりて、くるしき事のいやまされど、恨み奉らんと思ひて、此春の頃より後の山に候へども、流石に御前にはゆゝしうて、參られぬなりと答へたりしに、局はつら〳〵と

うちきゝて、あな淺ましや、武士は後の報を思ひて、君に盡すにあらず、常なる世ならば忘れもなされ給ふまじき人の誠、身をさへ忘れ給ふ此頃の世の中のみだれ故ならん。されど、それもかりなれど、とぶらひ得させん、何をうらみ奉るべきことのあるべき。さるにても御經にはいかなるがよき、御心にまかせ侍らんと云へば、法華經にしくはあらじ。さらば歸らんといふに、歸らん所は何處ぞと問へば、露と消ゑにし野の原にてそ凶き魂はうかれ候へとて　北をさして消ゑ失せたりといふ。局はをかしく思ひて、あとを見送り、さて、女院の御前に參りて、事のよしを啓せしに、誠に思ひ忘れてありしよとて、早速吉法印に命じて、御堂に二七日法華經を供養し給ひしに、其後は異なる事もなかりしとぞ。こはいとあやしきなるが女院が人の誠を忘れてはしたなかりしを、此局の覺ね居りて、わざとかゝる事を云ひて、後の爲いましめに、人のためにせしかも知りがたくなん。

この後、ひととせ、武藏守師直が皇居をねらひたりしとき、防ぐべき便りのなかりければ、なほ山深く入り給ひぬ。女院の御伴には、はかぐしき侍もつき奉らで、女房たちもかりなりけり。然るに、北軍の方にては、早くも此川の橋を一間がほど切り落して、行路をたちたり。人々あきれにあきれて、只茫然と水の流をうち眺めて、死ぬるより外せんすべも知らずとて、立ちまどひぬ。局も諸共にたゝずみしが、かなはぬまでも、我君をいたづらに此水に流し奉らんやと云ひながら、そのほとりの松櫻の大枝をひきをりく打わたして、女院をも負ひ奉り、人々をもつゞきて渡らしめて、難なく其場を逃れたりといふ。後に帝其時の大枝を、そのべの六郎に命じて折らせ御覽られしに、叶はで止みにけりとぞ。まことにや國亂れて忠臣あらはるとの言葉にもれず、親も親、子もまた子、何れ劣らぬ智

あり、勇あり、義ある行ひ、南朝五十年の春に、一種の花をぞかざりし。後に此局は楠正儀の妻となりしとぞ。

孝女とよ子感情父

岡部譲

田中延香隨筆濱の木つみに見えたるをそのまゝに

常陸國、下館領、下高田村に幸右衞門といふ男あり、常に酒に醉しれて、母や妻とものいひあらそふ事日々なりけるが、娘にとよといひて十三歳になるもの、此の體を常に見歎きて、ひそかに身を淨め、人々寢しづまりて後、毎夜五十度、日月を禮拜して祈りける。その年の十二月十八日に、妻が力を盡して織りたる木綿を二反、幸右衞門に近邊の町へうりにやりけるが、その價にて酒をかひ、酒に醉ひ過して本心みだれ、木綿代の錢のこらず使ひはたしぬ。母是を怒りて追出さんとするを、とよいたく悲しみ、とよの衣二つを父にわたへ、これを賣りて木綿代の錢を祖母に奉れといひけるを、祖母きゝて、もはや正月にもなりぬべし、その衣類なくば、正月の着べき衣類なしといひければ、とよいふやう正月になりぬれば、外へは出じ、内にのみ居て手業せんに、衣類なくてもすむべし、此衣代の錢を奉らば、父のあやまちを許したまへよと、祖母にわびぬれば、祖母もその心にめで、つひに父をゆるしけり。その後とよやはり五十度づゝ毎夜禮拜おこたらねども父の酒にくるふ事止むことなし。それよりとよ思ひたちて、三七日の斷食をして、誓願を立んとおもひ、二日、三日の程は内にてかくとも知らざりけるが、三四日にもなりぬれば、その事しれてとよに云ふやう、如何なれば斷食をするやといひければ、かく〳〵の事なりといひければ、みな〳〵涙をながし、それより立願いたし、なる事なればとて、家内打揃ひ、三七日の斷食をたすけやりて、滿ちける日父も此の事を感じ、又

神の助にて心を直し、正直眞實の人とはなりける。これぞとよが孝心によりて、神の幸ひ給ふならんと、ろの時人々いひあへりとなん。

家政

いけ花（十四）



田邊和氣子

梅一種の活かた

一種梅を活るには充分よき枝ぶりを見たてゝ眞には、苔など生じたるふりをかしきを用ゆべし。副はやすらかにして少しそりあるを用ひ、体には短かくして賑はしく花あまた付たるをさすべし。眞副体の間へは、いかほどあしらひを入るも、差支なしといへども、すべて十文字にならざるやう、小枝をため直し、又は切とりて活べし。花瓶はいかなる形をも用ゆれど、薄ばた、廣口、など相當なりとす。



いにしだに椿の活かた

いにしたは葉茂りて、活べき様にも見ゑぬ物なり。されど直なるよき枝をためて眞とし、前後へ又枝を添るとそへざるは、其時の都合によりて見斗ふべし。副の枝にも同じくあしらひを添るも差支なし。活上たる後にて、小枝葉など重りたるを充分にため直し、又は切

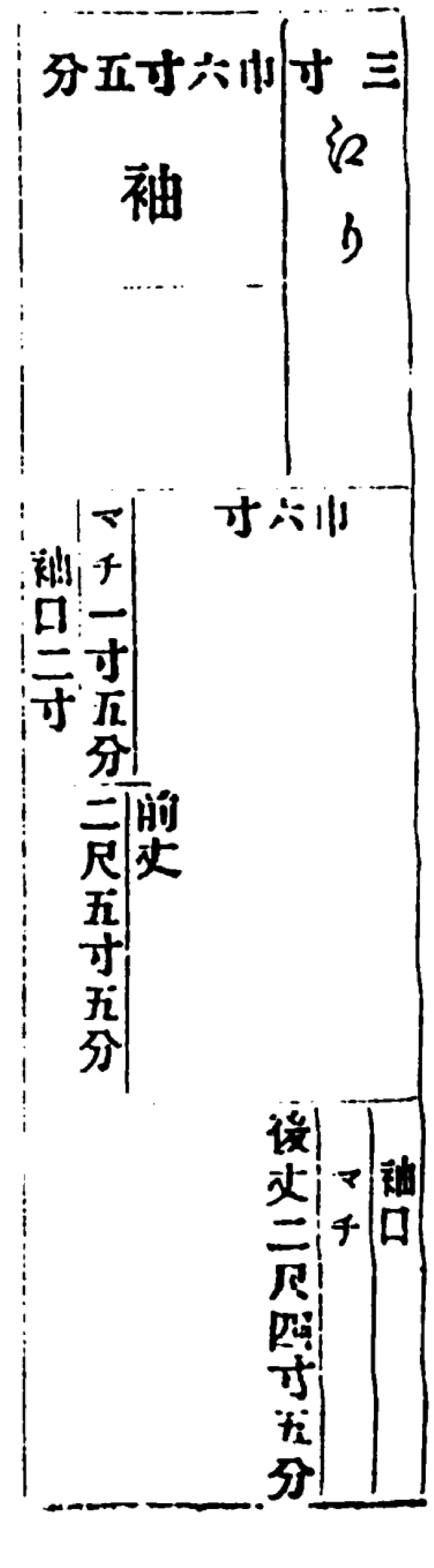
取。見恰好よくし、体なる椿は二枝又は三枝。花葉の都合によりてさすべし。花の數はつぼみとも合せて三か五にするをよしとす。

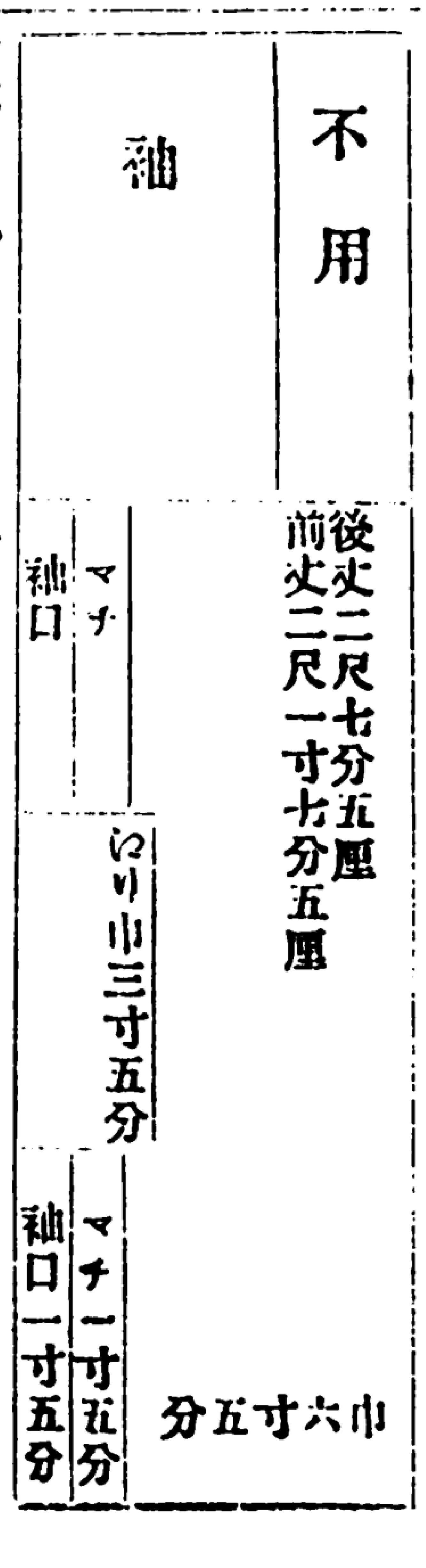
たちぬひ

西山たい子

(廿五)三つ身羽織の裁ち方

羽織も、衣服と裁ち方は異ならず。たゞそのオクビになす處を、襠及び袖口になすなり。丈けもみじかくても出來れど長けれど裏にかへしてかへり多けれど、裏少しにて足りる故、そは何れにても人々の心にまかせ給へかし。此所には、衣服と同じたち方を出し置きぬ。よく左の二圖を見合すべし。但し、前になる處を、一寸ばかり長くなしおくべし。

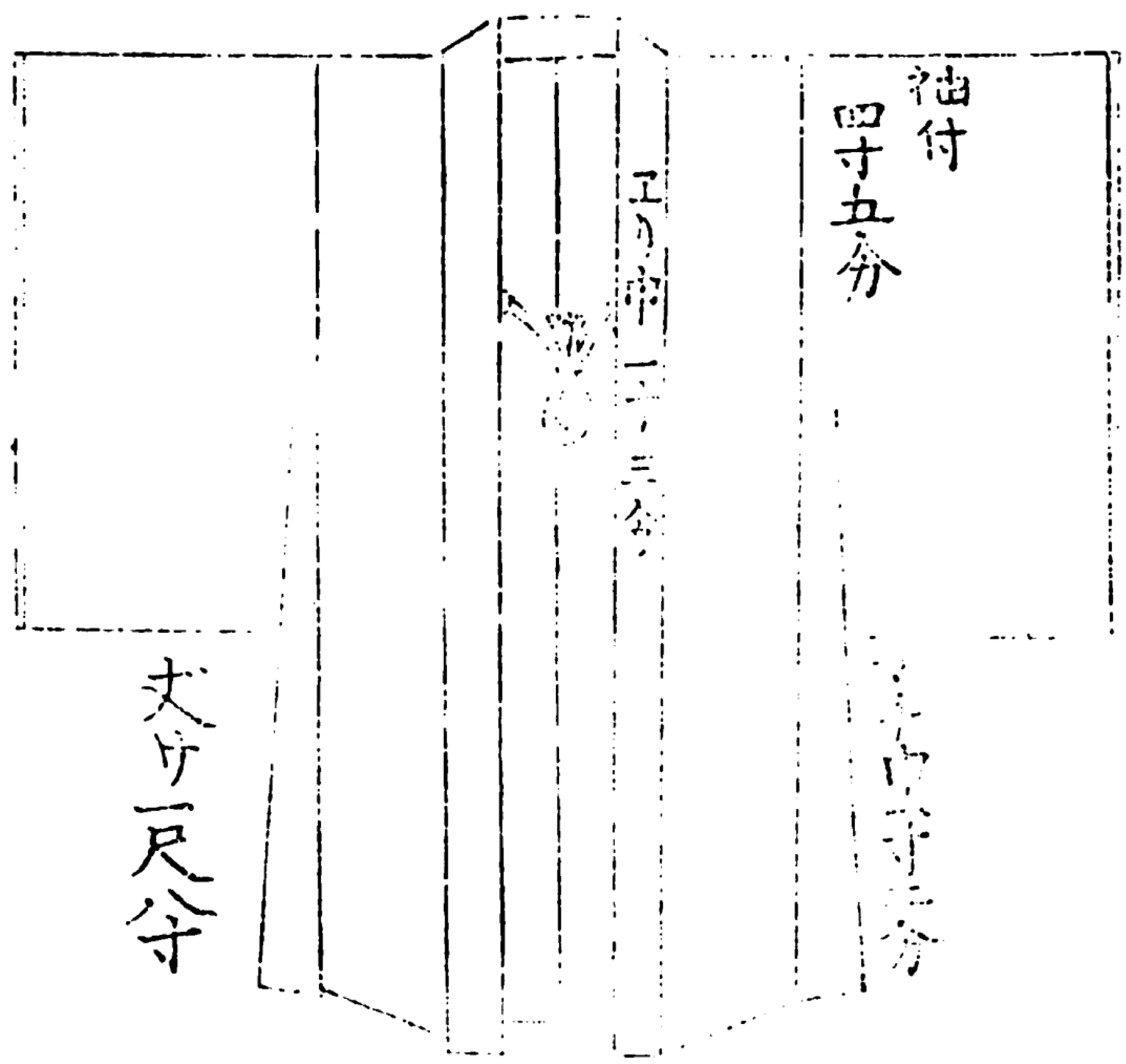




前圖の方が、三つ身を裁つには常なれど、それは裏表のある品にては出來ざるなり。しかのみならず、巾をひろく裁たんと思ふには、まして後圖の方よろし。

(廿六)その縫ひ方

まづ四袖をぬひ置き、背を裏表ともぬひ、一つ身の袖なし羽織の如くにしてぬひ、四袖をつけ、綿を入れひき返してくけるなり。圖を見合すべし。ぬひ方は、一つ身袖なしに同じけれど、くど〱しくはくりかへさず。寸尺等は圖にあり。



三ツ身羽織ぬひ上りの圖

だいどころ

握り鮓

白米の上等なるを擇みて、よく磨ぎ、白水の盡るを待ち、笊に揚げて上より水を注ぎて流がし、之を釜にて炊ぎ、扨て飯の出來たるとき、之を木鉢の類の平たき器に移し、酢に鹽少量を加へて、其上よりふり掛け、（米壹升に付き鹽一勺位に酢二合の割にすべし）杓子にてかきまはしつゝ、團扇にてあふぎ冷ますべし。其冷却たるを待ち、好き程に握ぎりて、上に魚類の肉を附くるなり。扨て鮓に用ふる魚類は、小魚なれど、ひらきて骨を去り、其小骨あるものは、毛拔にて之を拔き去り、大ものなれど只だ肉をよき程に削ぎて、後、少量の鹽を投じたる水にて洗ひ、笊に揚げ鹽を撒掛置き、別に酢と味啉の煮きりにて調味したる汁を作り、前の魚肉を其中に一時間程漬け置き、笊に揚げ汁を去りて、之を用ふるなり。但し右の調理法は鰺、鯛、「コハダ」、青魚、鱚、の類に用ふるものにて、其他海老は鹽水にて湯でゝ、皮を剝き、烏賊及び蛸は腸を去り、能く洗ひて湯で、赤貝は腸を去り、鹽を掛け、目笊に入れ振りつゝ洗ふなり、尤も酢と味啉の煮切り汁に漬く

るは、前に同じ。又た鮪は此汁に漬けずして、只だ削ぎたるのみにてよし「アナゴ」は割きて蒲焼となし、或は煮附となし、用ふるなり。

五モク鮓

飯の炊き方、魚肉の製法はすべて前に同じ。扨て五モク鮓には、必ず椎茸、干瓢、蓮根、獨活、人參、杯の野菜類を加へざるべからず。其品は細に切り、味啉醬油にて味を附くるなり。但獨活、蓮根は酢、砂糖、食鹽にて味を附くべし。右の魚肉並に野菜類の調理出來たるとき、此品々と燒海苔の細かにしたるものとを、飯に混ぜ合すれば出來るなり。

卯の花鮓

豆腐の滓を擂鉢にて好く擂り、裏漉にてこし置き別に煮出汁、酢、味啉の煮切の三品を混和したるものに、鹽を加へて味を附け、前の豆腐滓を鍋に入れ、此汁を注ぎて炒り上て、後ち冷却し置くべし。扨て此豆腐滓を握り固め、前の如き製法の魚肉を上に置くときは、通例の卯の花鮓出來るなり、其他青魚をひらき、前の如き手數を爲して、(洗ひ及び鹽を掛ける抔)後其腹の中に豆腐滓(前の如く炒りたるもの)を好き程に詰め、腹を元の如く合せて、美濃紙にて包み、之を布にて捲き、上下に板を當て、壓を置き、筒切になして用ふるなり。又鰯は皮を下にして、美濃紙の上に並べ、(洗ひ鹽を掛くる杯の手數は前に同じ)滓を其上に置き海苔卷の如くに捲き、布にて包み上下へ板を當て壓し置きて、好き程に切るなり。

海苔卷鮓

淺草海苔を片面よりあぶり、簾を置きて其上に布巾を擴げ、前の海苔を上に置き、飯を薄くならし、酢をふり掛け、其中程に椎茸、干瓢杯の煮染たるものを並べ、山葵の擂りたるを好き程に置き、簾にて片端より捲き付け、扨て好き程の長に小口切となして、用るなり。

このごろ

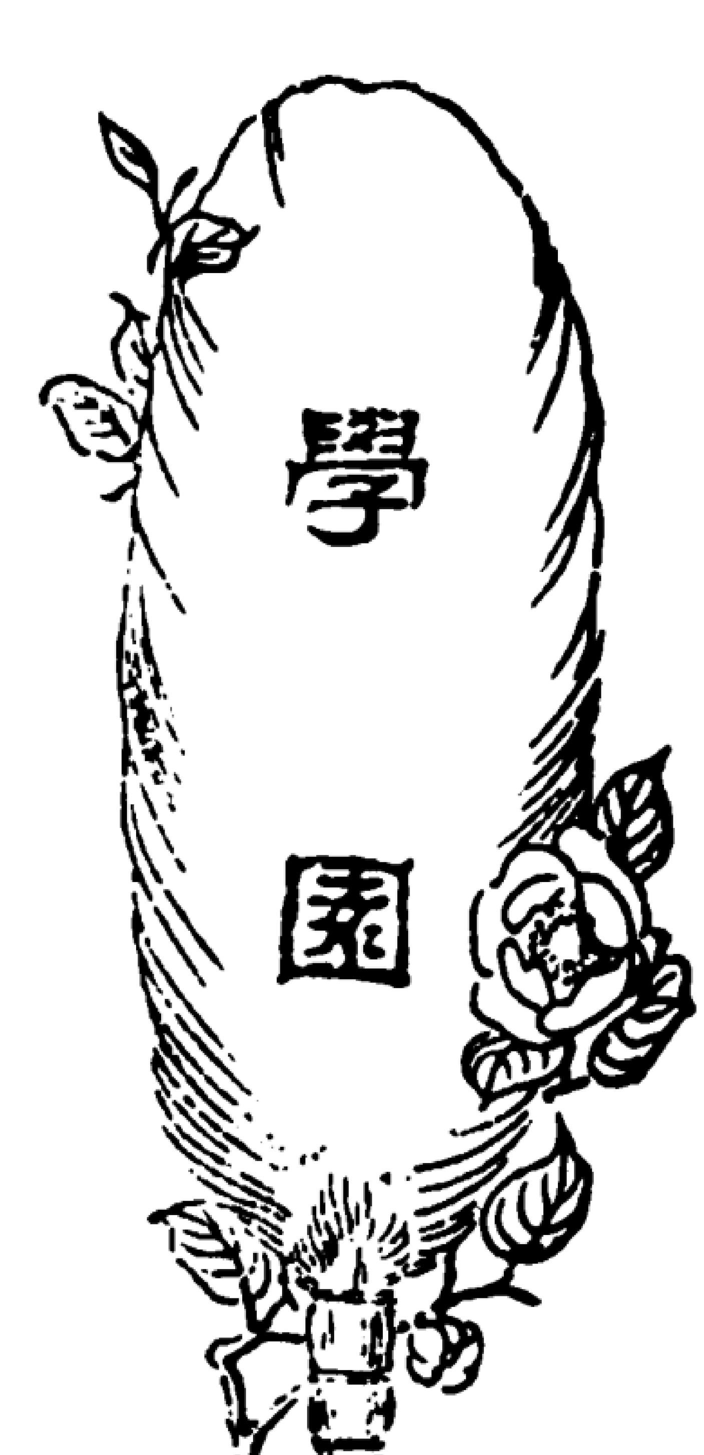
鋤柄義子

うめ、あんず、すもゝ、など植ゑかへもし、接木などするもこのころなるべし。
三月に入らば霜よけにれはひおきたる、ごみあくた藁などのたぐひれひ〳〵取りのくべし。
麥に肥をし、なたねのなかうちをすべし。
すみれ、りんどう、けまんさう、ゑびね。まんふう花、うゑかへてよろし

このころの花

磯野かつ子

まづは梅なるべし。桃は白もあかもあり。れんぎやう。つゞき。ぼけ。こぶし。水仙もあれどれそし。これにひきかへて菜の花さきいでたり。むらさきもくれん。あかもくれん。三月に入らば、ひかんざくらもやがてさくべし。このほか、ちやうじゆ。いぶき。ろなれ。やぎ。いぬしだ。



日本文典（五）

塩井正男

第三、其の音の促るもの

これも、音便の中の一種にて、例へば、「いうて」を「いつて」といひて、「う」音の「つ」といふ鼻音に促まる如き類をいふにて、五十音の中にて、「う」「ち」「つ」「ひ」「ふ」「り」といふ六音が、斯く「つ」と捉まるなり。これは殊更に例を示すべくもあらず。「追うて」を「追つて」といひ、「勝ちて」を「勝つて」といひ、奴を「やつこ」といひ、「思ひて」を「思つて」といひ、「尊ふとし」を「たつと

し」といひ、「取りて」を「取つて」といふ類、あげていふべからず。

第四、他の音の添はるもの。

これも、例へば、夫婦(ふゝ)を(ふうふ)といひて「う」音を添へよぶ如き類にて、斯く添はる音は、「い」「う」「ん」の三音と促音「つ」となり。一二例の例をあぐれど、詩歌(しか)を(しいか)といひ、至孝(しかう)を(しいかう)といひ、弑す(しす)を(しいす)といひ、弑虐(しぎやく)を(しいぎやく)といひ、四時(しじ)を(しいじ)といふ如きは、皆「い音」の添はりたるものなり。また、富貴(ふき)を(ふうき)といふ如きはうの添はりたるにて、皆(みな)を(みんな)といふは「み」音を添へたるもの、全(またく)を(まつたく)といふは促音「つ」の添はりたるものなり。

第五、半濁に成るもの。

これは、前に濁音の事を述べたる所にも、一寸いひたることにて、貧富を(ひんぷ)といふ如く、波行の五音(ハヒフヘホ)が、鼻音の「ん」と促音の「つ」との下に來れる時は、半濁りてよばるゝをいふなり。例へば、建白を「けんぱく」といひ、出品を(しゆつぴん)といひ、貧富を(ひんぷ)といひ、一變を(いつぺん)といひ、出奔を(しゆつぽん)といふ如きものなり。

音便は、以上の外に五種あり。斯の如き音便の詞といふものは、もと純正の音にあらず。世の中のうつりゆくにつれ、言語の彼方此方と流通しゆくにつけ、或は訛りて起れるにもあれど、故意に語勢をやさしうなだらかにせんと思ひて、殊更にいひ來れるもあらむ。またこれに反して、語勢を強くたけくきこえしめむ爲めに、殊更にわざとしいだせるもあらむ。或は漢語の字音を、我國の語調に似つかはしくやさしうせんために、自らしいでたるものもあらむ。かくて、かゝる五種の音便とも稱すべきものの起れるなり。いづれ皆中古

よりの事にして、そのふるき昔には無かりし事なり。音の事につきては、かくて數回のべ來たり、大かたはきこえたれど、こゝにて筆を措かんと思へど、今一ついふべき事あり。そは、轉呼音と稱するものにて、例へば、岩(いは)をよぶに、(イハ)ときこえずして、(イワ)といふやうにきこゆるがごとくまた(わう)王をよぶに(ワウ)ときこえずして、(オー)といふやうにきこゆるが如く、これかれ連合したる音をよぶ時に、其の連合せる音の中の最後の音が、他の音にきこゆる(第一例の如し)と、また其の連合せる音が、總べて他音にきこゆる(第二例の如し)との如きをいふなり。「れ」音と「ふ」音とを連合してよぶ時は「れう」ときこゆるが如きは第一の例なり。即ち、連合せる音の中の最後の音の變りてきこゆる例なり。又「あ」音と「う」音とを連合してよふ時は、「おー」と成りて、「お」を長くのばしたる如き音にきこゆるが如きは、第二の例なり。即ち、連合せる音が總て、他の音に轉じきこゆる例なり。一種の音便の如きものなれど、決して然らず。やゝ性質を異にせり。これはたゞ、呼ぶ時に、他音に轉せるが如くきこゆるのみにて、例へば鸚鵡(あうむ)を呼ぶ時は、(おうむ)といふやうにきこゆるも、やはり(あうむ)と書きて、(おうむ)とは書かざるなり。彼の白きが白いと成り、白くが白うと成り夫婦(ふふ)が(ふうふ)となり、(おもひて)が(思つて)と成る如き音便とは全く異れり。其の區別よく〳〵一考したまへ。なほ轉呼音の例を一つ二つあぐれば、顔(かほ)は(かお)ときこえ、首(かうべ)は、(こーべ)ときこえ、草紙(さうし)は(そうし)ときこえ飯(いひ)は(いい)ときこゆる如きをいふなり。

音の上の事は、此に筆をとゞめて、これより言語性質、活き等の上のことにうつらむ。以上四回ばかりのべ來れる如きさま〴〵の音によりて、我國の現在の言

語は成立せるなり。

言語の種類

言語の種類を區別するには、まづ二法あり。その一法は、言語の形の上より區別するにて、この法によれば

一、體言　語尾の動かぬもの

二、用言　語尾の動くもの

三、助辭(弖爾乎波)　他の語に附屬せるもの。

の三種となる。

第二の法は、言語の性質の上より區別する法にて、いま我國の言語を見わたして、これを區別せんとするに、人々によりて、其の區別ざま同じからず。極めてまち〳〵なる如し。

されど、わが思ふ所にては、

一、名詞(なことば)　例へば、月、花、色、香、の如く、總て事物の名をいふ詞なり。

二、代名詞(かへことば)　例へばわれ、かれなどの如く名にかへて用ふる詞。

三、動詞(わざことば)　例へば見る、讀むの如く、ものゝ業をいふ詞。

四、形容詞(さまことば)　例へばよし、白しなどの如くものゝさまをいふ詞なり。

五、副詞(そへことば)　いと美しなどいふいとの類にて、形容動作のありさまをいふに用ふる詞なり。

六、接續詞(つなぎことば)　語のつなぎに用ふる詞也。

七、感詞(なげきことば)　例へば、あゝ、やゝな

どいふ如き感動をあらはす詞也。

八、接詞(つけことば)

例へば、いゆき、みそらなどいふ如きい、みの類にて、名詞動詞などの頭尾に點つける詞なり。

九、弖爾乎波

の九種なり。形の上の區別は暫くおき、性質の上の區別につきて、順序にこれを詳しくのべむ。

額田女王の御歌

永石德文

こは大國隆正翁のかんがへたまひしを、さるものよりとりいでてなん。

莫囂圓隣之大相七兄爪謁氣吾瀨子之射立爲兼五可新何本」

此御歌荷田東麿翁は「きのくにの山こえてゆけ吾せこがいたゝせりけむいづかしがもと」とよまれ、賀茂眞淵翁も、亦多くこれに從はれたり。村田春海は二の句をやまみつゝゆけ、とよみかへたれど、能くよみ得たりとも思はれず。其後さま〴〵に說をつけて、とかく云ふ人もあれど、皆うまくよみ得たりと思ふはおほかたわらぬなり。おのれ若かりし頃、試みによみ解きたる事ありき。今思出でしるさむに、莫囂はかまびすしき事の無きにて、耳無なるべし。圓はまどかなる意にて、山なるべし。隣はとなりにて、耳無山の隣香具山といふ意ならむ。大相七の、七は木の字を誤れるにて、これはきにあへる木といふ意にて繁みといふ事ならむ」兄は見の誤、爪謁は靄の字の誤とすれば、見靄氣にていぶせし、と讀べきならむ。さらば「かぐ山のしげみいぶせし」とよまるべし。去か讀て考ふるに、此御歌

は中大兄命齊明天皇の御供にて、紀の國へ行き給へる時、額田女王は岡本の宮に殘り居給ひてよませ給へる御歌にて、香具山のほとりを過ぎて、紀の國の路へかゝり給ふ時、かぐ山の木立ち繁りて、よく見えざりけれど、それをいぶせく思して、かくよませ給へるならむ。いつかしは齊き給ふよしの木にて、いはひ杉などいふ類ひなるべし。香具山ちかきいつかしがもとを、今立ちいで給ひて、かぐ山のわたりを過ぎ給ふらむと思ふに、こだちのいぶせく繁りあひて、ねたくも見せぬことかな、とればす意をよみあらはし給へる御歌なるべし。

いらぬ物も　三年たてば　用をなす



涙草

堀田璋左右寄贈

涙草の撰者は、京極忠高公の御女にして、家臣多賀宮内が妻なり、萬治三年、四月二十七日卒す。法號は壽昌院殿茂林宗繁大姉、御嫡子、賴母は高和公の養子となり、高房と稱す、高豐公の御代、分知三千石旗本に召出され、延寶五年五月二十一日卒す。行年三十五才、男子なくして家絶ぬ。

◦　◦　◦　◦　◦　◦　◦

自序

この一卷、慶安三の頃、長月末つがた、暮はつる秋

の景色も何となく寂しきに、庭の淺茅生霜枯れて、尾花が末も色變り、時雨うちそゝぎて、霧深くみわたる空に、雁がねの心細くうち鳴つゝ、いとゞ物悲しく心すごき夕べの空を、しめやかに獨眺めて、越方行末の事どもを思ひつらぬるに、有爲轉變の有樣せきくわの光、電の影、夢幻の如く、風の前の燈火よりあだなるは、人の命なりけり、かゝる墓なき身を持ちて、自ら明暮いかにもして、此君に今一度逢ひ奉る世もやと、今行末をのどかに思ひ念ずるも、愚なる事になんありける。けふまでもあれどとて、夜の間の程知らぬ命を賴むべき物にもあらず。まして過にし春よりむねせきあぐるやまふ出で來て、ともすれど心地惡しく惱みがちに成ぬれど、時のまもしらぬ命ぞかし。この世をさりなんうしろの事こそにはあらねど我なからん跡のあらまし思ふも悲し。此君の人となり給ひて、代にたちつき玉ふとも、誰が

昔の事を語り聞かせ申べき。親のありさまなどは、夢にも知り給ふまじ。あはれと思ひ出給ふとも、初もはてもなき心地ぞし給ふべき。我れ此君を生み落して此かた、心を盡してたひたて、あまさへはて〳〵は雲井のように別奉りて、明暮淚に沈み、年を重ねる心の中をも、父の墓なく成給ひし有樣より初めて、あやしき筆の跡に綴りかきて、我なからん跡の形見にも見せ奉らむや、人の形見にははかなき筆の跡にましたるものなし。あとは千年の形見ぞと見給ふ度に、身の古へをもたどり知り給はんかしと思ひたちて、過にしかたのうれしうもつらうも有し折々、物のはう〳〵に書付置きし反古どもを、筐の中より求め出し、そこはかとなく書集めぬ。言葉遣賤しく、片言どもゝあらんかし。まいて、歌の道は夢にもしらねど、中々をかしくかたはら痛き事どもになんあれど、他人にみせ給ふべき物にもあらず。我御目一つ

に御らんずるには心得ぬ事どものあしき所はつみ許しても見給はんかしと、身の耻を省みず、志をしるべに書つゞけぬる物也。

思ひ川岩まによどむ水莖を
かきながすにも袖はぬれけり

をさゝ原露のきえなん夕べにも
この一ふしは思ひわかまし

木のもとにかきあつめたる言葉を
はゝその森の形見とはみよ

この言の葉を書列ねて、千度よみ百度みても、過にし言の立歸たるやうにて、思ふ心の淺からず。水莖に流れそふ衣河は袖のしがらみせきやらず。昔物語ふるき歌などさへ、我心よせなるは、身にしみてあはれにもおもしろくも有わざなるを、ましてこれはうちみるより涙止めがたけれど、涙草とぞ名づけ侍りぬ。

なみだぐさ

京極少將忠高女作

それ人のおやのこを悲しむ道は思ふにもあまりいふにも詞たらざるべし、山のけだ物、かうがのうろくづ、空をかけるつばさ、つちに生るたぐひまで、すべていきとしいけるもの、形はことなりといへども、心さしはかはるべからず。いはんや人として上がゝみ下がしもまで子を思ふ心のやみはひとしかるべし。こゝにやう〱よはひかたぶく身に一人のなんしをまうけぬ。めづらかにらうたき物から、夜光きん玉の心地して袖より外にははなしがたく、朝夕ひざの上にのみあつかひまはり暮しける。なまさかしき女どものさしあつまりて申けるは、あまりゆゝかしきまでうつくしう御ちごもほどよりは過て、おそろしきみえ玉ふに、かゝる御ちごをいはいやしき民の子になしたてまつりて、名をつけたるはなん御命もながくおはします物なりと申け

れど、人のきこゆるまゝにわくむらといふ里より二郎ゑもんといへるかたわをよびてなをつけさす。おのが心にまかせてさま〴〵の悦事どもさへづり玉ひつゝ、頼母の助と名づけぬ。やう〳〵いかもゝかも過ぬれど、日々に物をひきのぶるやうにおよすけまさりていとしきやうにうつくしく、つぶ〳〵とこえてわらひがちにものがたりなどし給へど、父のいとほしみ中〳〵いふばかりなく、夜晝懐きいつくしみ玉ふほどに、年もくれ春にもなりぬ。いとうつくしうおとなび玉ふて、愛きやうつきたる物まね、ひらうかはしくはひまつはれ給ふを、父もろともにこの君をかしづき草にて、いつしかありき給はん事を待、日にして明し暮しけるに、その夏の中頃よりちゝ君の心地わづらひ給ふ。おどろ〳〵しき病にもあらず。そこはかとなくなやみ給ふ、年月もかやうにあつしくのみおはしけれども、たび〳〵さはやぎ給へど、さにもころはとしどし心みるにをこたるけしきもなく、日にそへていとくるしげに見え給へど、いかなる事にかとおどろきさわぎても、もとより薬の力はこれかれもてあつかひけれども、かはるけぢめもなければ、京よりさるべきいしよびくだし、すほうときやうまつりはらへど心のいたらぬくまなく、さま〴〵の事をしつくしけれども、いさゝかのしるしもなく、まさるさまにのみおもりて佛神の祈もかなはず、かげとめんかたなきにかなしかりける、ふみ月中の八日つひに空しくきえはて給ふ。年三十七になり給ひし。さりともかゝる事あらんや、ゆめかと思ひてうつ〳〵心もなくおもひのどめんかたなきまゝに、しでしもおくるまじ同じ道にとまどはれけれども、世にとまるべきほどはかぎりあるわざにや、しなれぬもあさましう、やう〳〵人心地も出できて思ひしづまるにしもぞうき事のためしなりける。ふしても起ても涙のいとまなくきりふたがりて、はかなく過る日數につ

けても、かなしさのつきせず、いかで樂くながらへける月かなからんと心をさめんかたなし。

絶はてぬ命につゞきおくれしと
　涙の淵に身はしづめども

有し世はまくらのちりも厭ひしに
　ひとりやこけの下にくちなん

歎わびみしは夢ぞと思へども
　さむるうつしのなきぞ悲しき

よそにみしを花が露も此秋は
　我が袖よりぞこぼれそめける

殘ぬる身はうきながら明暮て
　日かずふるにもなきぞかなしき

夕ぐれの空にたゞよふうき雲や
　はかなき人の行へなるらん

袖の露もはらひにかぬる思ひ草
　しげれる宿の秋の夕べは

ゆふ月夜の出ると見れど、ほどもなく山のはに入はつる名殘も人のわかれめきて、

をしめども月はむなしく入はてゝ
　やみに殘れる身はいかにせん

三十あまり七年過し秋ごとに
　ながめし月もあだし世の夢

さらでだに秋の夕べは悲しきに
　なき人こふるわさちふの宿

（未完）

千代の春草

松竹居主人

この扁は上杉治憲侯、第五女た増の方生れさせ給ひしとき母君麗光院卒せられ、鷹山侯の御許へ引とらせ給ひ、養ひまゐらせらるゝにつきて附々の者へ示されたまひしものなり

今夫若草の萠出るは自然と春陽の朝なる氣土中に滿

ち、發生の時に感じ若芽を出し、夫より東風のそよ吹くに動かされ、春雨のしど降るに潤され、長閑なる日影に照らされて、目には見えねど、日に増し月に添ひて、其の時々程よく人の力もて養ひ立れど、見事己々の受得し天性を成就して、花咲き實のるものぞかし、若その生出たる初に、惡き風に吹き靡かされ、强き雨に打たゝかれ、烈敷日かげに照され、惡き霜雪に侵され、又人の手入も其の程を過なば、その天然の生氣くぢけやせ枯て、終にその形もゆがみ出り、生ひ立し後と見よからず。麗しき花も吹き得ぬものぞかし。但萬物は天地の偏なる氣を受たる物なり。人は天地の正氣を受得し者なれど、成長の後、智惠分別も諸物とは格別にして、天地も此の人の力をかり給はねど化育の功も屆かぬ處ある故に、天地に並びて三才とも稱し、萬物の靈ともいふ也。されども生れ出し其の初はむて々々としたる斗にて、乳を飮む外の事は辨へたる事もあらざれども、父母のいとほしみ生育するに養はれて成長し、人ともなる物ぞかし。されど其の父母の養ひ方が即雨露の惠ぞかし、其の雨露の養ひ手入が惡しければ、見苦しくかしげて生ひ立つなり。其の雨露の養ひ手入の仕方といふは即東風をそよ吹かせ、春雨をしとふらせ、日かげを長閑に照らさせ、養ひを時に先だゝず後れず程よくする事なり。その東風をそよ吹かせ、春雨をしとふらせ、日影を長閑にてらさんは、如何なる事ぞといふに、皆是今日の上の事に物々に有て其の子を取扱ふに、物靜にして先我が心を潔うし、柔和を專らとし、心の内に一物を貯へず、有の儘にして、起居振舞しとやかなるが即その子にわたる東風其の子を潤す春雨、その子を照す日かげなる也。夫よりしては飮食衣服朝夕の調度まで、皆其の宜しきに適ひて、過不及なく、其の時々に隨ふべき也。風を厭ひて風を避る事厚ければ、遲れて枯るゝ基なり。雨を凌

じため、雨除け多けれど燥きにいたみ、日を避けて日蔭大いなれど、色つやのなきが如し。唯ろの風も雨も日影も程よく受けしめて、其の時々の手入も程よく手を入べき事なるぞかし。況や女子の育ては何くまでもしとやかにもの柔かなるこういとはしきものなれ。是皆成長の後にこそと思ふものなれど、一尺の草も一丈の木も、土を穿ちて生ひ出る其の初より養はずして、一尺一丈の後花實を得べき其の時に臨みて俄に手入をなし、枝など採れど木勢病んで其の天性を失ひ、能き花實は結ばぬぞかし、人も幼少の内捨置きころの年頃に至りてやれ夫と世話し敎ふるとも、其の初あしき癖付ては届かぬものぞかし。敎育は其の始に有てれ、てん〳〵としのひ〳〵と云ころ百年の基なれ。されど易と云ふ書にも蒙以正養とあり。蒙とは物を蒙りたるをいふ。物かむりては目も見えず、耳も聞えぬ也。夫よりして童の辨別もなきを、たとへて蒙とはいふなり、其の何の辨別もなき内より邪にならぬ正しき道に導けど、骨折ずして成長の上も正しき人となるといふ事なり。ろの辨へ別ちのなきを喩し導くは、言語もて敎ふべきにあらず。其の取扱もて感通する事也。夫物の感通する程妙なるものはあらじ、猫をすく人の側へはしらぬ人とても自然に寄り添ひ、嫌ふ人の側へは寄り付ぬものにて、捕ふる心のなき人の側へは鳥も驚かず、捕ふる心ある人には間遠く隔ちても忽ち飛去るなり。人と鳥獣の上だに感通の理はまぬかれず。況や人と人の上をや、耳目の及ぬ所にも感通の理は有るぞかし、今度れ増どの手元にて養育の事なれど、今日の上より取扱ころ大事なれ。偖又一切の幼稚なるに、何事ぞ事々しく無用の辨に似たれども、敎育といふは生ひ出るより始まり一日も欠ては叶はぬ事にて、段々と成長に隨ひて、其の時々の敎へ方、育て方もあるぞかし、先々今の上は朝夕の取扱をいかにもやかまし

からず事靜かに物柔かにして、其の付添ひ扱ふ人々互に能和合して、馴合ひ、お増殿の側へ寄る時は先我心を和して自己の上を愼むこゝろ、初にいふそよ吹く東風、しとふる春雨、のどけき日影なり。しらず〳〵の内にいつしか感通の理わりて、先へも入るぞかし、まして乳など參らす折に、必しも心を平かにして、深き心もて參らすべき也。たゞ何事も春の日のうらゝかに悠々たる心持こゝろ有まほしけれ。今の上の教育にて迂遠なる事に似たれども、かく育て置かねど、末に見事なる花實は得られぬ事にて肝要なる事ぞかし。物は始を愼まざれど、終を全うし難き故に、理屈らしき事なれども、千年の今日を始めとし此の心得を皆人に云ひ知らするものぞかし。

（正　誤　女鑑第百一號野浪の若菜の始に治[illegible]候とあるは治[illegible]候の誤なり）

たきの玉藻（六）

永石徳文

こゝろがくべき事

千卷萬卷の書を見ても、千何萬何の理を聞ても、其理を守らず。身持なはらぬ時は無益のよみ事なり。學問する事は身のおこなひ志をなほさんがためなり。一句一言の理を聞ても、よく道理を合點してまもる時は其理にかなひ一切の事へわたりてよし。

何やうの奉公人もつとめの外の隙も有ものなり。是非ともと、志時は學問も成るべし。又後世の修行も成べきなり。是を以て知るべし。主人もなき人の隙のなきといふは、志のなきゆゑなり。されど智者はあさねひるねつひゐなるはなしなどにて、日をくらすを樂みとはせざるなり。只學問して義理をよくあきらめて、心の内に歡樂とす。

子に藝能ならはせざるは、父のあやまりなり。訓導の

をろか成は、師匠のとがなり。父もならはせ、師もよくみちびくに、しかも子の習はざるは、子のつみなり。あた丶かに着て、あくまでくひて、ねぶりをもとむるは、最下の人なり。子にをしへざるは子をにくむにことならず。教へてまなばざる子はわが身をしらずして、恥をまねく成べし。よくまなぶ時はいやしき者の子も、たつとくなり。ものうく思ひてまなばざる時は、公卿の子も庶人と成ものなり。田ありても耕作せざる時は、倉の内むなしかるべし。書有ても教へざれば、子孫愚癡成べし。萬錢はもとめやすく、子孫の賢はもとめがたし。子孫愚なれば、禮儀をしらず。親のうれひ數々なり。小事もつとめざれば、成事なし。よく習ひてころ發明とも成べきなり。よくまなびて道徳をつむときは、凶邪をもれろる丶事なし。千金を子にゆづらんよりも、一藝ををしへたるははるかにまさるといへり。（子孫寶草）

林梅林諷諫の語

一　あら面白の春雨やな花をちらさぬ程にふれ
一　あら面白の酒盛やな禮を忘れぬ程にのめ
一　あら面白の茶の湯やな武事を忘れぬ程にたしなめ

よろづのものこと中庸をよろしとす。過たるは及ばざるが如しとは、か丶ることをいへるなり。禮もすぐれば、へつらひとなり、愛もすぐれば、かへりて害となり、運動もすぎなば、かへりて疲れとなるべし。物にたばる丶といひふけるといへるなどもみな度をすぐしたるなり。心のうごきやすき人はことに心すべきなり。

取捨

虞、夏、商、周、いづれもひじりの御代なれば、その樂のれなしからざるは、時代のちがひあればなり。も

し聖人をして、此國にむまれしめば、此國のときよをかんがへ、樂をつくり給ふべければ、また一様にはあるまじ、虞の樂、夏に用ふべからず。夏の樂、商にもちふべからず。商の樂、周に用ふべからざるを見て、もろこしからの樂は、此國にもちふべからざる事をしるべし。ことよの樂を今にもちひ、ことくにの樂を此國に用ひたらましかば、くすしの一方をもて、百病を治せんとするにひとしく、人の心を感じて風をうつし、俗をかふるたすけとはなるまじ。（たはれぐさ）

樂のみにかぎるべからず。すべて自他順逆をとりちがへず。とるべきものと、とるまじきものを、よくわきまふべきわざなり。一部のよきことにおぼれて他の一部のあしきものまでとり入るべからず。又一部のあしきことありとも他のよきところまですつべからず。今の世にもあることとなるべし。さて風をうつし俗をかふるといへることとよくあぢはひても見よ。放伐をことゝすなる國にては、己れ國をせめとりたらんにおのが國の風をもうつし、俗をもかへざるべからざらめども、わが皇國にて、比ひなき美風をすてゝ又いかなる風をかうつさんや。ますゝ國風をふきおこしてとつ國にこそうつすべけれ。自他の別ゆめわするべからず。うつしかふるといへる意をとりちがへたりないひそ。

◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦ ◦

わがくに

から國のおもきつかさする人、おはせいとがにあひしをりふし、朴射夫といへる翁ひそかにかたりしは、わがくには、郡縣の世にて、下なるもの、上にすゝみやすきまゝに、自然と御かしうでともおほく、又は、まひなひも、おこなはれて、あしたにはさかえ、ゆふべにはおとろへ、世の中しづかならずさふらふ。其御國の、みな人、その分定りたるこそ、うらやましとおぼゆれといへり。

これはふるき事なり、よくおもふ人はしるべし。(同上)ふるき事なりとのみ思ふべからず。よく世のありさまを見よ。このごろ何ごとにも競爭といふことといたくおこなはれて、遂に弊も加はりきて、さむかりならぬ人の重きところをねんとして、巧にいひ、あるはたからをもて人を啖はするものもなしとはいふべからず。競爭といふことあながちに惡しきこと〻はいふべからずといへどもかくなりはて〻は其害いふべからず。わが國のうちにありとある臣民はみなわが兄弟同胞なりといふことをわすれて、たゞ目前の虛名空利にのみはしりて、互に利をあらそひ、名をむさぼり、人をつきたふしても、おのれまづたゝんと謀り。人をおとしいれても、己まづ利をえんと欲す。これ小人なり。小人多くては國の光をかゞやかさんことかたしといふべし。國の內の人々は互に相ひたすけ相まちて、さてこそ外國にもたちむかふべかめれ。兄のたからを弟のとりえたりとて、はこるべきにあらず。兄、弟にまさりたりとてこれ亦はこるに足らず。一國はなほ一家の如くなるべし。世界にあらゆる他の國々の人々如何なることをするか。首をあげて、遠くのぞめむ、安き心もなし。みな眼をするどくし、爪を磨ぎわれがちにと心をたくましくす。今の世は兄弟あひ鬩く時にはあらざるべし。ひとよりうらやまれもあふがれもしつる國風を、笑はる〻やうのことありはて一世の恥この上もなかるべし。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

ありがたき國

此國のごとく、おほきなる弓をもちふる所、外になけれど、もろこし人の夷といへるは、もと此國をさしたるにや、大連少連といへるも。此國の人なるべし。孔子の九夷にをらまくおもひ給ふも、此國孝順の俗ある

事など、き丶傳へ給へる故にやと。或人のかたりき。もろこしの外なる國ども。狄といひ。戎といひ。蠻といへる北南西ともに、けもの、むしのつきたるもじなれど、ひがしの國は、仁にしていのちながきゆゑさはなきなりと、もろこし人のいへることぞあり、もろこし代々の記録をもけみし。又からのふうぎをもしたしく見るに、げにもとおもふ事おほし。されど仁といへるも、そのみちを得ざれは、まことの仁にあらず、いのちながきも、其人々の心にこそよるべけれ。ありがたき國に生れたる人は、その道をつくして、もろこし人の言葉うそならぬやうにすべきにや。（同上）

夷といふ文字は大といふ字と弓といふ字　合せたれぞいへるなるべし。ありがたき國とはわが皇國の如き風義正しき國は世界に有り難しといへる義なり。げにさることなり。五倫五常などいふ理　はみな孔子のいへる言よりおこれりと思ひひがめたる人もあるめり。これさにあらず。わが國古來人の道たゞしかりしなり。されど漢籍の渡來したりしとき論語はわが國の風によくかなへりとて、とり用ひ、孟子は國風にかなはずとて、讀むことを禁ぜられしことありしを以ても知るべし。いにしへより、うづもれたる美風を今の世にあきらめおこして、さて外國の人までも、其徳にうるほはしめむことこそ今の代の人のつとめなるべし。

雛あそび

森　幹三郎

男の道はいさましかるべきをむねとし、女の道はすなほなるべきを心とす。此は時の古今を論ぜず、洋の東西を問はず、萬代の末も猶かはるまじき常の則なりけり。されど其の遊戯の種類につきても、自らわきだめあり。されど男子の遊に付てはこゝにいはず、余は

只婦女子の遊戯中殊に彼の雛あそびにつきて、聊か思ふ所を陳べんとす。

夫れ婦女の務の重且大なるは今更言ふ迄もなく、其の如何によりては國家に迄大なる影響を來すべき者なれど、幼時より此を敎育する迄に於きて、亦最も心すべき事たるや論なし。されど其の常の遊戯に付きても能く其の善良なるものを撰びて、勉めて之をなさしめむ事、肝要なりとす、余が今こゝに雛あそびを取り出でたるは他なし、是れぞ幾多の遊戯中尤も善良なるべき者、尤もゆるかせにすべからざる者と認たれどなり。

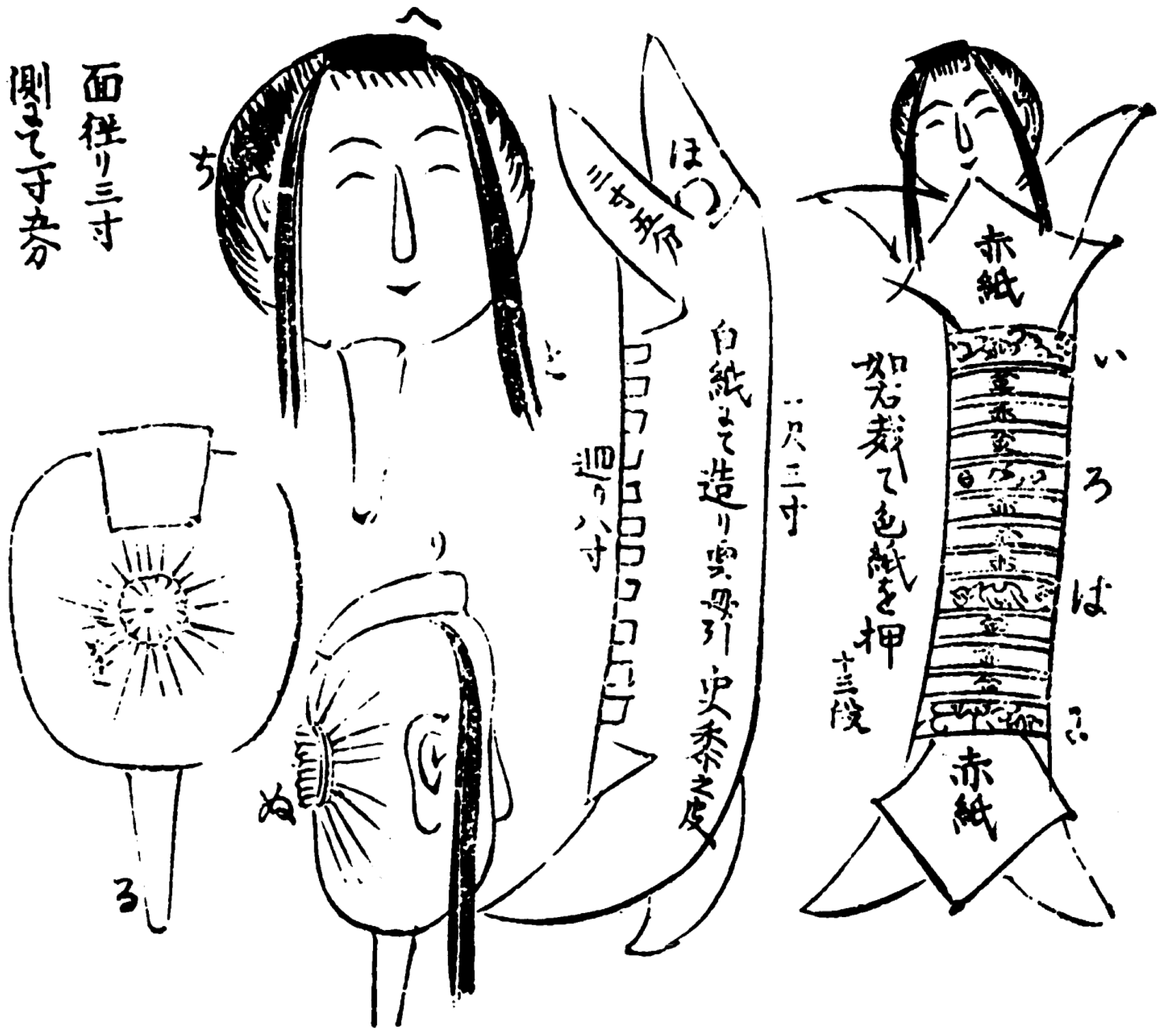
抑この雛あそびは、よそめにはいとはかなくをさなけなる者のやうなれど、幼者を敎育する點に於て、忽にすべからざる者なり、試に中世以來の我國の歴史に徴して考ふるに、婦女子の敎育は、實に此の雛あそびによりて養ひ來りたるもの丶如し。上はやんごとなきあたりより、下は賤しきたぐひにいたる迄、いたく此を奬勵して、常の遊の業としいへど、専ら雛遊に限りたりしが如し。いにしへ人は何を以てかく此を奬勵したるぞ、これ全く婦女子を敎育するに付きて大なる効力ある事を知りたれどなるべし。

凡て女の心は男に反してすなほにこまやかなるべきを要す。其のすなほにこまやかなる心を、幼き程より能く養ひ成さむには、此の雛あそびを勉めてなさしむるに若くはなし。豈たゞに其の心を養はしめんのみかは、此の雛あそびこそ、實に婦女一代の行爲を豫め習はしめんとするに、大なる効力をたもてる物といふべけれ。いで左に其のよしをあげつらひてむ。

思ふに雛とは古人が凡て小き物を稱せし總名なりしより、うつりてはさゝやかなる人形の名に負ひしものなるべし、雛古くは又はふことも稱せし。今は其の製法こそかはれ、いろ〳〵の衣服を着けしめて、此を弄ぶさまは、蓋し今も猶同じかるべし。其の製法及沿革等

につきては、聊いはまほしき事もあれど、其は他日に譲りて、こゝにはむねと其の効力のみをいひておく。抑余が所謂其の効力とは何をかいへる。見よ彼の少女が其の人形の爲にいろ／＼のきぬをたちぬひ、さて之に着けしむるに、二重三重若くは四重五重の衣服を以てす、これ第一には幼時より衣服裁縫の思想を養ひ、第二には豫め衣紋衣裳の着け方を習はしむるにつきて、大なる効力をたもてるにはあらじか。次には其の人形の顔にぬるに白き物を以てし、あるは其の髪を飾り結び其の口を色どるに紅を以てし、さては其の眉毛を畫く如きは是れ早くより其の身を裝飾する方法を知らしむるに於きて大なる効力をたもてるにはあらしか。かくて其の人形には或者を男に、或者を女の形に作り出で、これとこれとは夫婦なりとか、彼と此とは兄弟なりとか、この者はこれの子、其の者は何と、かりに皆夫々に名を負はしめ、やがて婦たるもの丶夫にかしづくべき道、幼者の長者に事ふべき道、母たる者の子を養ふべき道を象る如きは、皆是他日其の身の行はざるべからざる道を、兼てより習ひ知らしむるに於て、大なる効力をたもてるにあらじか。次には又かりに甲の人形を主とし、乙の人形を客と定めて、客來の有樣をうつし、互に其の應接をなさしむ。さては其の客をもてなすとては、膳部をならべ、これに對して又主客の應接をなさしむる如きは、是婦女の務むべき禮式、即ち社會交際の道を、つとに學ばしむるに於きて大なる効力をたもてるにあらじか。此の他髪上紐解の儀式の如きに至る迄、いづれも皆此の雛遊によりて、學び知らしむる事を得べし。斯の如く其の効力のある所を擧げ來れば、殆ど婦女一代の行爲は、此の雛遊によりて、盡されたりといふも、敢て不可なかるべし。これ余が雛遊は女子家庭の教育に於きて、尤も必要なるもの、幾多の遊戯中尤も善良なるものと斷言せし所以なり。

蓋し古人が勉めてこを奬勵したるは、かゝる効力のたもてる故にして、中古以來の婦女子は實に此の雛あそ



びによりて、其すなほに且こまやかなる天然の思想を養ひ來りしなりけり。さるを當時にありては、雛あそびとしいへど、只に三月上巳の節句にのみ限れる如く思ひなし、常は此を弄ばしむるにさまで、心を用ゐざるにいたりしは、女子家庭の教育を忽にする點に於ていともくなげかはしき限りなりかし。あはれいかで古にかへすよしもがな。

おのれ近き頃さる書店にて見出したる古き書の中にはふこの畫をかきそへたり。いにしへの製作を知るに聊か參考ともなるべきものなれど、こゝに世の婦女子たちに紹介しまゐらす事とはなしつ。

(い)は黒紙金紋菊唐草(ろ)は背紙金紋(は)青金紋寶盡(に)黒紙金紋菊唐草

(ほ)首サシ込穴　(へ)黒紙(と)黒繻子ホツン長三寸五分(ち)黒書髮

(り)黒紙にて前髮の如くす(ぬ)中へ黍の皮を入れくゝりしめる、紙にて造る(る)木を以て造る、雲母引、胴へさしこむ(を)頭不殘黒書髮

(わ)木にて造付雲母引、(口)朱(耳)黒書

以ちていにしへ人が如何に其の製作に心をこめたるか

を知るに足らむ。

諺につきて（つゞき）

壚井ふく子

霜枯の庭にも春の通ふらむ
やれし垣根の梅さきにけり

とくちずさみつゝ朝戸あけて、下りたゝんとするに、やみね〳〵、妾もとく見つけたれど、先きがけをしては人に憎くまるゝと、兼ねて母君に聞きつれど、今にひかへをるなりと、妹なる人にとゞめられぬ。げにさなりしよ。諺に、主人に供へずして己れまづ食すれど、にくまるゝなりとあり。げに、長者にはおくれよ、先き立つものは敬禮の意を失ふもの故、にくまるゝはもとよりの事なり。飲食にかぎらず、何ものにても心せよと、母なる人が常々のいましめにてありけるものを、おぞくも忘れたり。よくも心づけくれしよと云ひさま、父なる人を呼び起して、待たせ給ひたる花がといへど、伏見の里にはあらねど、ふしゐて色をも香をもとゞめたり。最早かまはじと云はれけるに、いとうれしく、すぐに下りたちぬ。げに、白妙の星のこぼれたちたる如き花の、五つ六つは笑みたるが、昨日今日もえ初めしとればしき青柳の糸にむすぼれたる、さながら玉をぬきとめしかと思ふむかりなるに、心もそらに、萬の事うち忘れてたゝずみぬ。かくて、日はいと高くのぼり行き、花はいよ〳〵かぐはしく、おぼろげならずかゞやき柳はみどりの色のはえ出でゝ、床かしさいはん方なし。かやうなる色に香にいでしを見れど、手ぞめにされし佐保姫も甲斐ある心地せられん。浅ましや、人と生れたる此身の、色も香もなく、未だ親々にも師の君にも、ろむきまつり、草木にも劣りたるはづかしさよと、忍びかねて机の本に來り、思はずもふとき息をつきけるに、わな憎くや、我子はためいきをすれ

ど、親の壽命のちゞまると云ふ諺あれ、未だ知らでか。といきは思ひ屈する折りに出るもの、子に迷ふ親心に、子のといきをきゝて如何ばかりかなしからむ。げに命のちゞまる心地ぞする。汝なほ母を思はゞ、孝行などせんとは思はで、何事もおのづからにまかせ、たのしく、うれしく、世を思ひたらんがよきにとて、後に立ちたまひたる母親の顔、ふと仰ぎしに、額のすぢ、白髮のかず、にはかにいや増りたる心地しぬ、之につけても世のかりそめの諺も、誠におろかにはならぬものなり。耳のかゆきを堪へてかゝず居れど、福來ると云ふ諺あり。俗にほめらるゝを、かゆき事を聞くと云ふ。ほめらるゝは誰れもうれしと思ひて、すぐ誠とすれどいつはり多き世には、誠ならぬ事の多かり。かゆきをこらへよとは、ほめらるゝをも忍びに忍びて、なほよく事をかんがみ、道を行へど、遂には誠のほまれをうるなり。又けぶきを忍びえぬ人は、人中に交はる事能はずといふ諺は、誠によくあたりたる事なり。うき世はうきもの、つらきもの、けぶりよりはなほむせびくるしきものなりとなり。また、ものさしを手わたしにて受けとれど、よき中もあしくなるなどいへり。之もまたみだりに人の心をはかりとるべからず。そのやうの事しては、遂には、中もわれんとなり。よき中に垣をせよとのことわざより出でたるならん。例のひが言、定めて、をことればしめさんが、さゝやかなる事にも心づけんには、後悔少なからむと思ひてかくなん。

黑白の爭

住山幾子

この一章はねびかづらとなんいへるふみにみえたり。いま抄出して、記者足下に呈す。

甲斐の國に青島貞賢、[illegible]の一翁あり。共に圍碁を好めり。二翁共算知道策が類ひにあらず。所謂屁幕の

範圍内を脱せずといへども、其力量にいたりては、兄たりがたく、弟たりがたし。こゝに至て互に石の黒白を爭へり、一日青翁岱翁の居を訪ひ、約するに一つがひの勝を得たるもの、必ず白を取らんことを以てす。而して先合先を試む。青翁終に敗をとり、將に歸らんとするに及て、心緒をのぶ。

斧の柄はいざしらねども一つがひ
　まけて歸るがくちをしきかな

再び二翁の會するあり、青翁雄たけびしていはく、予誓て白をとるべしと、而してまた敗せり、岱翁快然うたひていはく、

ゆき霜のふりし身なれど白はこれ
　かしらとともに人に渡さじ

青翁のまたうたへるうた

こゝろせよしらゝかはまによる浪の
　うちかへすべき時もこそあれ

岱翁小聲につぶやきて曰く、まけをしみないひ給ふと二翁三たび會して戰をいどむ、知らず岱翁中押にされんとは、岱翁遺憾に堪へずして、うたひけらく

白髮をかしらと共にとられしは
　かちてかぶとの緒やゆるびけん

青翁いはく、まけをしみにあらざるか、岱翁餘ぎなく再びうたふ

長ひげの白はとられてみじかゝる
　智恵ゆゑ黒を授けられたり

青翁いはく、それよし〳〵。

梅見

草の屋主人

梅の名所も、國々に少からず。なかにも、大和の月が瀬ころは、勝れたるながめなれとは、久しくきゝてあれど、人づてにきけるのみ、まのあたり見ねど、記

るすによしなきも、山間の溪流も面白げに見られ、月ならねど、たづねてすまゝほしとおぼゆるばかり、幽邃かぎりもあらざるわたりなりとは、いつぞや誰れかの畫ける圖にもたばゐてなつかしく、此の春もはや幾夜の夢にかあこがれゆきけむ。

都わたりには、龜井戸の臥龍梅、それにちかく江東梅、やゝはなれて木根川の梅園、隅田堤の櫻に隣る百花園の梅屋敷、北にむかへど內藤新宿の彼方なる月世界、やゝ遠く西にあゆめど大森の梅園、蒲田の梅屋敷それをゆきすぎて遙かなる杉田の梅。いづれも都に香も高き梅の名所とて、ころとしいへど、都の人の馬をつなぎ、車をとゞめ、杖をひくかげも、いと榮ゆる所なれど、あまりに粧りたるは、なかなかに風情乏しく、あまりに賑ひ榮ゐイは、俗氣



のみ紛々たるを如何にせむ。

杉田の梅こそ、そが中に見どころ多かれ。横濱の町を離るれど、川添ひの路のけしきも面白く、殊に舟の便りあるは興多し。海岸なる岡の裾に半腹に咲けるなれど、月か雪か、はなやかなるにほひに、鏡か玉か、あを〳〵と海ひきつらねたる海の色、げにこそながめはてなき心地するなれ。ちかき岸によせてはかへる波を、迎ふが如く送るが如くほゝゑむ梅の姿あはれに艶なるけしきも憎くからず、いたづらに風の誘ひやる花に、亂れかゝりて爭ふが如き波のけしきも、捨てがたくあはれなり。殊にやゝ都に遠ければ、多くは眞に花を見る人のみにて、花を見る人を見んとてか來るやうなる人の少くて、さはいへさすがに靜かなるこそ、花もつきは身にしみてればゆるなれ。

―――――

野寺の墓

（は）　石榑千亦

七兵衛の思ひたのみしことは、みなあだなりき。勝藏の手はさえたり、力もあり、年も似合はしきは、さゝしに違はず。されど氣は淸し、心はすぐれたりと、中間の人々の來ていふは、彼等は勝藏に、あるは物を貰ひ、あるはよき酒、うまき肴を饗應せらるゝことあるによりて、まかはめいふか、さならば下に使はるゝよすがにとの、心ありての事と、くさ〴〵に思ひひがめて、中々に堪へえず。されど常に、一年が一年、人にやとはれたりとて、日に一圓の大金得たりとて、かひなき骨折、何のせんもなきこと。徒らにのみくひ、着かざるのみか、人にこへ與へて、殘さうともせぬ心得違ひ。何のこれが氣心よきもの。中々にあれの半分とりても、其儀のこす方まされり。いかに男振よければとて、いつも金子のなきものが、何のよき事かある。人に顏ばかり見せて、世の中が過ざるゝわけのものと

思ふか、人にほめられて嬉しからむよりは、にくまれても長者になるが、まさりて嬉しとは思はぬか、夕飯に一度にても、酒か丶しつる事もなし。此上われを貰ひてよりは、お雪までがこしらへてくる丶とて、柔らかきものみの着て、親の苦勞を思はぬ不孝者となりぬこれといふも、皆汝のしつけわるき故と、隙だにあれば、お初に小言いひてありしが、うちつけに、勝藏にさへ折々はいひ出づるやうになりぬ。されど心にもとめずて過しゝが、或時、兩親のいつも襤褸のみ纏ひてあるに、われら二人のよき衣きてあるが、あまりに目にもたち、ことに新らしき年の始は、月も日も改まりぬべきにと、糸織の衣一重に、羽織など取そろへ、其料にとて、縞柄など似合はしきを、妻にえらびてもとめ來よとおはせて、數多の金子とらせければ、男ながらもよくお氣のつかる丶方と、わが身にこしらへくる丶よりもうれしく、さぞ父上も母さまも、およろこびなされむと、しむしの隙にとりよせてければ、御心には叶はせ給ふまじけれど丶、笑かたまけて、夫のさしいだすに、こはそもいかに、思ひ設けず、いと不興に叱りつけられ、か丶る樣にては、とてもわが身代は讓られず。末は野となるとも、山となるとも、よき衣着たきか、われは露ほしくもあらずと、叩きつけて怒らる丶に、うらめしく、口をしさ、いふ斗なけれど、親なればと思ひつ丶、下らぬ頭わざと疊につけて、あやまりければ、さても負くること嫌ひなる夫が、よくも忍びくれぬると、雪子は靜かに涕れさへて喜びぬ

(に)

星が岡の木葉は、おく霜に皆から染みわたり、太平の世に醉ひたらむが如く、紅き色に出し秋の朝も、桃櫻艶をきほひ、柳の糸だになびかず、のどけさ限なき春の夕も、いつも野分だちたらむあとの如く、風あれ雨ふきすさぶは、越後屋一家の内なりけり。されど雪子

はさすがに親といひ、此世しりそめし折より、さる性なりとしりてあれど、さしも頑固なるわざも詞も、目にも入らず、耳にもたゝず、心にもとめてはあらず。いみじくなりゆきても、霞たらむ空、風あるゝ時と、忍び忍びてもありしが、勝藏の目には、さしもあらぬ事までいみじう見ゑ、耳にはさまでならぬ事も烈しうひゞけど、一たび他家に入りて後、辛抱のならぬによりて、出でぬとか、出されぬとかいはれむは、人目にも憚わり、世のきこゑもいかゞと、忍び得ざらむことをも忍び、堪へがたき事をも堪しは、一つには、妻はわが心を知れり。彼だに知りてあれど、まことにすまぬ事なれど、兩親とて、いつまであるべき人にもあらねど、孝行といふは出來ずとも、せめてさからはぬやうにして、末の樂をまつこそよけれど、人に怪しまるゝまで、我といふ心を折りて、仕ふるほどに、いさゝかは父母の心にかゝりし村雲も、はれわたりけむ、前のやうにもあらず。よしともわかず、あしともしれず、おぼろげに月日はたちて、二年目の睦月の末つかた、月の如くうるはしき、男の子ぞうまれたりける。夫婦ともによろこびあへり。されど夫妻のうれしとよろこびしは、其面わのうるはしきによりてにはあらず。二人の中のかすがひは、やがて親子の間のくさびともならむ。これよりゆくさきは、この子につけても、いよゝ堪へ忍び、又親たちも、子よりいとしといふ孫につけても、今までの如くはあらじと、頼めるによりてなりけり。七夜もたち、名も家内中打より、父の思ひにまかせて、金一といふ名をおはせて、二つなき寶とぞしける。（つゞく）

落花

柴田千稻

第一　只眞二つ

夕日影千紫萬紅の千草の波に沈み、遠山の巓を滑り來る冷颪は蘆荻の枯葉を掠めて隅田河邊水音寒く、漁火波のまに〳〵明滅して縷の如き欸乃の聲は切れつ結ばれつ。やがて立籠めたる霧の衣は裾より綻びて、晴れたる滿天に星は落花の如く、北斗を横ぎる旅雁一列、何處に迷ひ行くらん鳴く聲悲し。

暫く經て銅の盆の如き一圓の月、尾花が袖を別けて軋り出でぬ。天も地も始て明かなり。

かゝる時靡き横る芒の叢を押開きて、俄に立上りたる武士あり、修羅の戰場より逃れ來りたる者と見ゆ、髪は枯れたる草の如くにれどろ兩の肩に亂れ、紫裾濃の鎧の袖には折れたる痛矢二筋三筋斜に貫きて、草摺はさながら蓑の如く裂け綻び、脛甲の邊には紅の如き血汐滲み出でゝ、二十計りの紅顏も色衰へ、凉しき兩眼には血條蜘手に攪れて嚙み緊めし唇は自ら震ぬ。

かくて暫くの間は石の像の如くに動かずして月の光を眺め居りしが、やがて滿身の熱血を絞りたる長大息をなし、おぼつかなくも草を蹈み臥せて歩み出せり。歩む事一二町にしてさゝやかなる沼の傍に出たり。葦の葉は冷なる風にそよぎて漣波徐に動き、斜に映ずる月の光を弄びて金蛇を走らしむ。其汀に投げ出されたるが如く腰を卸して、暫く死默したりしが、やがて、少しく躙り寄りて兩の手に水を掬し、乾きたる咽を沾して胸板を撫でたろし、苦げなる息を休め居りしが、又大空を仰ぎて慨然たる眦を抉し、嗚呼天道は是非を別ち給はざるか、將た人定りて遂に天に勝ちたりしか、暴虐雙びなき奸賊輩、五月蠅の如く群りて醜草の繁り蔓り、悲しや王師は常に利少くして日毎に南風の勢は衰へ、空は絶間なき浮雲に閉ざされて朝日子の御影の照したまふ時は何時ぞ、吉野の奥に花咲く春の來るは何時と知られで、木葉散り亂れ露霜繁き苔の上に、恐けれど袖を絞り給ふ大宮人の涙のみ深し。此身は賤し

き生立ながら、我祖先は新田殿の旗本に指を折らるゝ剛の者なりしを、僅の過失より自ら身を退きたる者の由、況してや民として大義の外の道を歩むまじき者とは知れり。あはれ大君に捧げまつらん此生命を、年こそ未だ若けれ、錦の旗の御前に身を棄てん覺悟は誰に劣らん、いざや起てと故郷の土を蹴りて二三の郎等を從へ、此處の陣彼處の戰に從ひまつりしが、此度測らずも重圍の中に陷りて、寄せては返し返しては寄せ來る敵の尖先鋭く、流石の味方も力盡きて半討死なし、御大將の御陣にも亂れ入る流矢雨の如く、見渡す四邊は凡てこれ楚歌の聲、猶豫せば事愈々急なりと、單騎鞭をあげて群る敵中に躍り入り、追ひつ追はれつ當るを幸に斬り惱まし、漸く一道の血路を開きて嬉しやと思ふ途端、風を切つて飛び來る征矢一流、我駒の横腹を眞直に貫き、アハヤと思ふ内我身も一間ばかり投出されて既に討れたりと思ひしに、ふと覺むれば、夕陽を負ふて草叢の中に倒れ居たれど、未だ討れたるにはあらで只二三の痛手を負ひしのみ、驚き訝りて起ち上れば、敵も味方も何れにか引退きけん、擊ち合ふ刄の音もなく叫び呼はる聲も聞えず、只折れたる弓矢裂れたる鎧、扨は生首屍体の此處彼處に横はり伏し、折々蕭々たる風の千草を渡りて音信れ來るのみ、無念よ、さても死にくれたり、今より何の面目ありて生を偸まん、死ねよ、腸掻きさばきていで死なんと、鎧脫ぎ棄てて其場に坐り、腹撫でれろして見事十文字にと思ひしが、倩々思ひ廻せば、今は死ぬべき時にあらず、此死ぬべき生命を暫し存へて、君が落ちさせ給ひし先途を見屆け、再び兵士を驅集めて旗上なし、陣頭に駒を馳せて天晴武士の標本を示さん、左なり暫し何れにか忍びて時の至るをこそ待たてと、漸う此處まで落ち來りしが、あはれ北風寒く氷雨降りそゝぐ此冬は何時晴るゝ折あらん、それに就けても惡むべき足利兄弟、肉

を刻み骨を摧きても尚余りある不忠不遜、見よ天の神地か祇の御怒りは覿面其身に報來りて、七つに裂け九つに裂け肉は溶け骨は粉となりて飛びて四邊に散亂せんと、拳を固めて慨然天の一方を睨み、迸る血の涙を揮ひて憤りを留め兼ねつ、かゝる折しも後の方の草叢夥くし噪ぎて耳を掠むる人の足音あり、驚きて顧れば身を鎧ひたる三人の武士、薄を押開きてぬつと立てり。されど若武者は流石に噪がずして徐に其爲す樣を見てあれど、彼等はずか〱と側近く進み來り、首領と覺しき者先づ口を開きて、物申す、我等は此地の住人に候が少しく御願申す儀の御座つて罷り出で申したり、無禮は御免候へと、若武者が前後を圍みてぢりゝと詰寄る樣如何にも由ありげなり。此方は其有樣を見遣りて輕く打頷き、願とは如何なる儀に候か、一應承つたる上にて如何にとも御答申すべし、御話し候へいざと少しく身を浮して片手は確に、腰の太刀にあり。彼方は口元に小皺を集めてヂロリと見おろしつ。早速の了承重疊に候、余の儀では御座ちぬ、其許の物具一切借受け申したうて候と、圓なる兩眼を瞬きて身構なし、いざ心克く御渡しあれ、如何で御座る、御返答次第、刄にかけても借り受け申さうぞと、威猛高に兩肩を聳して、土も窪めと足踏鳴らせど、蓬々たる黑き熊髯はさながら帚の如く逆立ちぬ。されど此方は平然として眼前を過ぎり行く雲烟視し、いや何かと存ぜしに其儀で御座るか、御易き事で御座る、最早戰場に臨まねど用なき具足、さらば脫ぎ候はん、御免つと咄嗟腰を捻りて三尺の太刀は電光石火、刄鳴を立てゝ横樣に走れど、一人が兩足は草の如く薙ぎ返されしと見しは僻目、彼方も流石に曲者なり、既にかくあるべしと覺悟したりけん、身を躍らして空を切らせ、矢叫と共に嵩より眞向に討ちれろせど、褁れ此方ぞ血烟の中に眞二つ、露の玉の落ちて摧けしと思ひ

しに、早くも脱兎の如く身を拔きて彼等が後に立ち、一喝して其刄を空に振ふと共に、身は草叢を潜りて流電の如く走りぬ。千草は驚きて高波を織りぬ。影は忽ち消えぬ。

扨は已れ、卑怯、腰拔め、逃るとも逃さじと、野武士は滿面に朱を注ぎて長刀を振翳し、其跡を追うて驀地に馳せ出せり。馳する事二歩三歩、殆ど五歩も進みし頃、如何にしけん其首領は俄に撞と倒れ伏せり。跡の二人は驚きて走り寄れど、こは如何に其体は何時しか二つに剖れて濃き黑き血はさながら瀧の如くに流れ出つ。愈々驚き呆れて互に言葉なく、唖然として只顔を見合すのみ、颼々たる風は音あり。（未完）

時雨（ろの四）

白魚女史

汝なれど新らしういふべくもあらねど、雲りても天は天ぞ、地の低きと云ふ事ゆめ忘るゝな、文子よ。いかに呉竹のすぐなるふしを立つるとも、ほこりたる振舞のありては、ゆがめると露異ならぬぞと、なほも行末をいましめらるゝ父なる人の言の葉。文子の世にめづらしき一ふしも、此君の子なれどにやあらむ。あなありがたき御教訓、必ず／＼心にとめ侍りて、つゆ忘るべき事には侍らず。必ずとかしこまりて膝を正せど、数ならぬはゝその露ながら、よくこそさどかりめづらしき撫子とは生ひ出でたるぞ。やさしや、うれしや、文子。此母はさとさるゝとも、なか／＼にさとす事も覺えず。さはいへ文子、思へどいたはし、かゝる過世のありとし兼ねて知りたらば、今少しは樂みもさせ、父君のの給ふまゝに、庭の敎をもさどかりきびしうはせざりしものをとて、かきくどかるゝ袖も瀧なす千條の涙。文子は身もうくどかり覺ゆれど、膝近うすがりよりて、あな物体なき御言の葉かな、過世の未來のとゝう

るさきゆかりの色もたる身と生ひ出で參らせて、御兩親の御心のまゝにもならぬ不孝者、吉野や次郎や、二人ころはわれならず、必ず思ふやうの色に香に生たち候て御二方を慰めまつる事あらむ。只何事も二人に慰めさせ給ひてよ。まれなれど、世にはなほうどんげの花もありとか、埋木にもまた花さく時のありと歌にはきくものを、願ふは母さま、身のなるはてを、さぞかりに御心にかけさせ給はでとて、强ひては、笑みて、心も袖も美くし文子が江口方へとつぎたるは十九の春、花も今。

かどかりにわれより思ひたちてとつぎしもの、もとより夫に姑に唯まめやかの一方に心の限りを盡くして、かしづかんものと、文子はやさしう、れとなしう、つかふとすれど、如何にかしけむ、姑はうれしげなる氣しきなく、當分は客分にとて、夫の側近うよせず。己れものも事に隔てがちにうちとけずして、文子が心と共にかをりこまやかなる茶など汲みて、持ち行く時あるも、飮みたうなしとて、澁げにのみすげなく退ぞげられぬは、さても酌みかねたり。終日机の前にて暮らすも、あまりに人の妻らしうあらずと思ひて、母樣何にてもお仕事をとて、幾度も請ひ、やう〱にとり出だし給ふを、うれしく早々に縫ひ上げて持ち行けど、彼方此方とみから見て、はては褄がと云ひて、といきをつかるゝに、ぶ調法なる縫ひ方、どうぞよろしきやうに敎へさせ給ひ、直さむやと、やさしういへど、否よくは縫へたれど、我が思ふ如きの褄にはあらずと云ふなりとて、よろ〱しげにながめ給ふに、此度こそは母樣に伺ひて、思ばし給ふやうに縫ひ侍らん、何にても今一つと云ひても、重ねては命じもしたまはず、さはとて敎へもせられず。文子のなす事は、何にまれ氣に入らぬけしきのみの見ゆるぞいぶかし。

むかし伯母御〱と呼べるをりには、世にやさしうま

しませしものを、御年のよらせ玉へるにや、いとう萬事にむづかしうのみなられし事やと思へど、やさしき心にさのみは心にもとめず。こゝら山里、軒にかゝる雲のけしき、庭にはほふ木の葉の影、なづかしうも覺ゑて、をり〳〵は庭におりたち、垣の卯の花を手折りて瓶にさしなどし。朝日の影も都よりは床しとて、ひとりとく起き出でゝ、空のさま、山の景などながめ歸りては机により、何をかうつしをれど、あな孃樣のいつも〳〵れ早き事やと、つれて來にたる媼の聲のするに、いつまでも媼は人を孃と呼び居るよとつぶやくのみ、ふりむきもせず、なは一心にうつし居る机のほとり近う、媼はいざりよりて、あなうつくしう山の端のうつされし事やと云ひつゝ、しどしさしのぞきて、草葉ならぬにいつか露けき袖うちはらひ〳〵、かどかりにも御心をつくし玉ふがいとをしやとて、畫の上にこぼす一しづく。あな媼、なさけなき事もするかな。我夫にれとらじものをと思ひて、一心に書きたる此畫を。あたらにじませてよ。さるにても老いてもよう笑ふ媼よと、日來思ひ居りしに、此の二月三月の涙もろうなりたる事や。妾が好む山里は、汝には心細さにやあらむ。妾ももはや大方なれたれど、御身は里へかへられよといへど、よしなき事せし、ゆるされてよ。田舍は生れし處心細うはゆめ〳〵侍らねど、貴孃樣のれいとほしうのみ思はれてと又も涙。

あな何がふびんなる。母さまが御目ざめの樣なり。くりやの事われも手傳はん。とく〳〵。さても老いては愚痴になるものやとつぶやきながら、文子も、諸共に立ち上りて、またもや庭に下りたちたり。

如何なる露の身にかゝりけん。文子は、ふと別れし折りの、はゝうの露の思ひ出でられて、すゞろに置きどころなく覺ゆるに、かくてはとて、彼方此方の玉笹のろよ〳〵として、玉の光りの何となうすゞしきをたよ

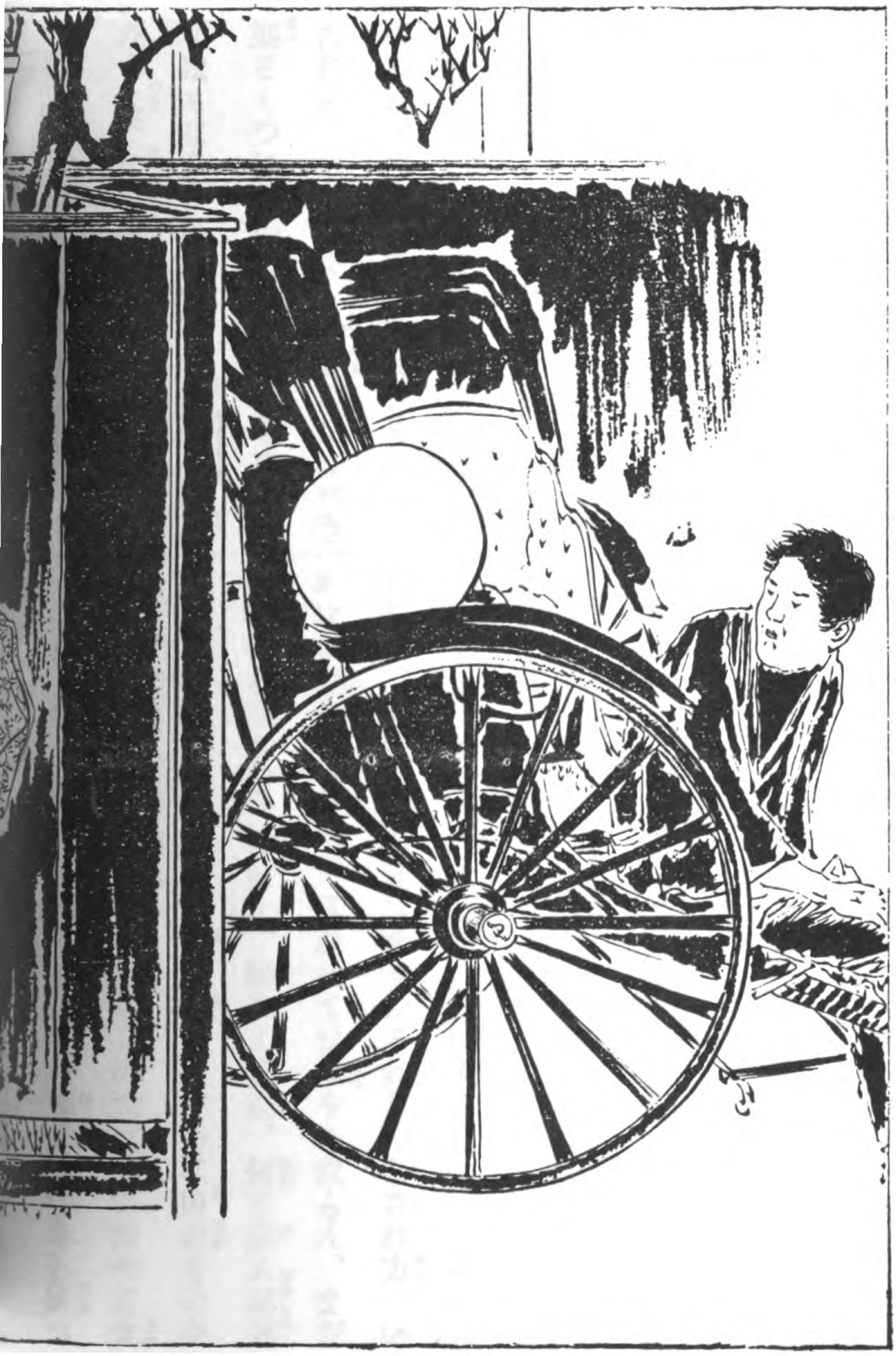
りに立ちよれば、はしなくも此の君よと云ひにし人の面影の心にうつりて、なほもえたへぬ心地。竹にいかなる心地ある、そよと云ひてみきをふるはして、はら〳〵と面に露をうちかくるに、いよ〳〵たへ難くなりて、仆れぬべき心地しけるを、やう〳〵にうちしづめて、何たるしづくぞとて、袂を拂ひつゝ、我夫は起きさせ給ひにしや、夜の物ひるのもの收むるほどの後見ばかりは、よしや客分なればとて、さしつかへはあるまじに、今更にそのやうなる事云ひて、願ふもうるさし。嗚呼何事もおのづからにまかせてんなど、つぶやきながら、己が部屋に立ちかへり、またも机にうち向ふに、一通の書の置きあり。表書には江口樣方文子の君と、したゝめて、さし出したる方の名はなし。誰ならん、何處よりおこせしならん、誰が置きしにかといぶかりつゝ、とくひらき見れど、

此君と思ひしふしのいづくまで
ふかきや色のいやまさりゆく

山に入るも、谷に入るも、これのみこそはだしとやならめ。思ひわたり給ひてよ、文子の君。

と、したゝめあるに、文子は驚ろきて、あなやとばかりふしゝづみ、しばらくは前後も分かぬ思ひなりけるが、やう〳〵身を起して、此の君がうきふしやと云ひながら、ひきさきてまたもよゝとばかりふししづむに、文子や、今其處に文が見えてなるが、何處よりこしにか。きかせよと、思ひもかけぬ母の聲。文子はこれはとゞろくを、やう〳〵にれししづめ、いはけなき都の友より、里しらぬはかなき事を云ひこせしなれば、そのまゝ手をふき侍りて、きれ〳〵にさへなり侍りしと云ふ顔を、姑はうち守りて、こはけしからぬ振舞よ。よしやはかなきかりそめの音信なりとも、母にも夫にも見せず、ひきさくなど云ふ事やあるべき。御身の名あてにてこせしなれば、人には用なしと思ひて

の事ならんが、そは今様の事なり。今様は此の家にはにつかず。風上みにおくもいまはし。只今いとまやらん。いまだ妻と呼びしにもあらざれど、何のむづかしきこともいらず。とう〳〵歸られよ。ざるものは一時もおくはいまはし。こや嫗殿、其方も諸共に早う孃樣を連れ行かれよ。何を泣く事のある。今様の女子にも似ぬかひなき人や。文子早うゆきね。嫗殿〳〵と呼び立つるに。文子はかなしく、母樣ゆるし給ひてよ、妾が心の至らざりしなり、どうぞ御ゆるし遊ばし玉へとて、ひたすらに手を合せて、ふしをがむとすれど、日來より心に合はぬ事のみ、さきし手紙の元にも反へらむともあれ、老いたれど、いひ出でゝ今更にひくべき我身にはあらじ、嫗とくつれ行かれよと、いきまきたけるに、文子は、なほもなきつわびつ、千太郎樣は祖父樣の結び給ひにたる夫。母樣祖父にめんじて、今日ばかりはゆるし給ひてよ。これよりは、必ず〳〵母樣の思ぼさんやう心せんに、母樣よ〳〵ゆるされてとわぶれど、すがれど、常よりきかぬ氣の老女の聽くべくもあらず。かく云ひ出るからは、一寸もひかじとて、すがる手をふりはらひ、なほもすがるをつきのけ、かきはらふに、嫗は見かねて、あなあまりなり、御姑御樣。御家に居られし折りとて、あのやうにきびしき父御なりしかど、御手など一度も上げられし事はなかりしほどの孃樣、かく申さむ、嫗に似ざる事かはおばねねど、御家には過ぎたまふ嫁御。何の不足に思ぼすことありて、あけくれ、はしの上げ下ろしに、にらめちらして、奥齒に者のはさまりたる如きのなされ方、いかに御姑御なりとて、それにては罸やあたらん、まだそれのみならず。ゆけよ、歸れよとは、何と云ふ思召にかとて、たゞみかけて泣き入るに、あな田舍ものや何と云ふ己が田に水の引き方ぞ、かたはらいたやと文子は嫗を叱りつゝ、母樣重ね〳〵の無禮、ゆるし給ひ





てよと、わび入るれど姑はいつかなきかず、老いたるものに罪あてゝはすむまじ、罪あたりの處に、など居る事のある。早う歸れ。媼早うつれ行けや。とく〳〵とせき立つるに、媼は今はたへ兼ねて、云ふ事やあるべき、いねなどゝるもいねん。いざ孃樣、お立ち遊ばされよ、貴孃が如何ばかり御心をつくし給ふとも、かゝる邪りたる御姑御は、木とも石とも例へやうのなき御方、よしなき心勞する處かは。あな孃樣のいくじなさよ此處より外に行くべき處はなしと、このやうに貴孃が御心のよき故、御姑御のあのやうにつけあがらるゝなり、貴孃ほどの御方、こがるゝ方は山ほどなり。先日も深見樣に御目にかゝりし時、もはやれ嫁子を迎へたまひてにやと、尋ね侍りしに、いな一生獨身にてとて、去はく〳〵と見ゐたまひき。貴孃が行かれなば、如何ばかりかよろこばれ給はん。媼が此處には置き申さじ。是非につれ申すと立ち上るを、失禮なる事ばかり物知らずにもほどあるぞと強くうち拂ひて、文子は、母樣どうぞゆるし給へ、此處を去りては、また身をよすべき處なき身、まげてゆるさせ給ひてよとて。わぶれどすがれど、ふり向きもせず。何をかさら〳〵としたゝめ終り、やがて卷き收めて封じ、此手紙もて早う行かれよ。家風に似ぬ嫁、母が去るにいふべき事のあるべきと、車さへたのみやりて是非にいねと、きゝ給はねば、文子は今はすがらん袖もなくて、たゞひたなきになき沈みたるぞあはれなる。

百里のさこころに
いたらんさすろに
九十里を半させよ

文林

梅風　近衛忠熙

咲梅のはなの香をかり身にしみて
　風のさむさはわすられざりけり

水邊梅　久我建通

梅が香のたゑずながるゝ川しもの
　はるの住居やのどけかるらん

雪中鶯聲　東久世通禧

ふる雪に友まちをれどうれしくも
　おとづれにけりうぐひすの聲

早春海　佐々木高行

風はまだ身にしみながら海づらは
　のどかになりぬかすみ初つゝ

霞始聳　高崎正風

ふじの根の雪にさしたる朝日かげ
　まだゆからぬやかすみなる蘭

鷲のかたに　勝安芳

水やろうくにちもわかぬ北の海に
　はをのす鳥のなにわさるらん

鶯春友　壬生基修

友とのみたのむうぐひす嬉しくも
　あけぬよりこそ音づれにけれ

折梅花　津輕承昭

見ぬ人のためにひとえた手折けり
　のなかのみちの梅のはつはな

若木梅　前田利嗣

老たるも千代の色香は見ゆれども
　わきてわか木の梅のはつはな

瀧氷　諏訪忠元

音にきくつゝみの瀧をきてみれど
こほりにとぢて流れざりけり

名所若菜　宮地嚴夫

花はまださかぬさが野に初わか菜
つみにと人のまづつどひけり

早春雪　鎌田正夫

立かへるはるのけしきも見えぬ哉
うめもやなぎも雪にうもれて

水邊柳　飯田武郷

ねたしとや川邊のみづの思ふらん
かげはながれぬあをやぎの原

小式部内侍　仝

たらちねに先だつ路もなくなみだ
とむるわかれのせきと成にき

春寒　三浦千春

みな人のこゝろゆるびに冬よりは
さむさや春のならひなるらん

竹間鶯　仝

葉籠りに啼とはすれどうぐひすの
こゑたかむらに隱れざりけり

二月十三日雪見んとておもふどちふたり三人うちつれて芝濱舘にいたる車中にて雪中美人といふ題をさぐりて　大畑弘國

小からかさ吹雪にとりて手弱めが
すまへる風のにくゝもある哉

芝濱舘にて　仝

打ち渡す安房のとは山かきくれて
雪のせかへる海士のつりふね

逗子のたびねにて尺八を吹きける人のありけれど、玉童恕童などの人を思ひ出でゝ　龜谷行

笛の音を聞けばそゞろに思ふかな
ともにあそびし人のおもかげ

都早春　藤井行麿

御しめなは春のはじめはみやこ人
大路せきまで四方ににぎはふ

嶽松帶雲　仝

なに波がた空におとなき雲はみな
生駒がたけのまつにかゝれり

寄山祝　岡部譲

とこしへに虧ず崩れぬ御世なれや
みなみの山もよりてつかへつ

初聞鶯　仝

うぐひすの聲とけそむる軒ばには
垂氷もいつかおとなかりけり

明治廿九年のはじめに　東宮鐵眞呂

たかさごのにひ民艸も今としより
君が御代をば千代とほぐらん

寄山祝　仝

比ひなき富士の御山のすがたらめ
わが大御代のためしなるらめ

二月ばかり人に別るとて　永石德文

春がすみ君がゆくてを立ちこめよ
路まよひなばかへりくるかに

月前柳　鍋島榮子

春さめはいつしかはれて靑やぎの
枝にかゝれるゆふづきのかげ

河春月　松平健子

河ぎしの梅のにほひもかすろひて
かげなつかしき春のよのつき

旅中鶯　柳原愛子

家にあるこゝちこそすれ旅やかた
なくうぐひすの聲をきく日は

早春松　　千種任子

春がすみたなびきそめて山まつの
かはらぬ色もあらたまりけり

梅花薫風　　園祥子

わが窓のすだれうごかす朝かぜに
何處ともなくうめが香ぞする

磯若菜　　小池道子

旅ねするみやこ乙女も小ゆるぎの
いそなつむ子にまじる春かな

橋邊柳　　北島以登子

橋もりの家もさだかに見えぬかな
しだりやなぎの打けぶりつゝ

霞添山色　　三島竹子

少女子のころもの色にそめまほし
かすみたなびく山のけしきを

草漸青　　服部磯子

里の子がいでゝ摘までなりにけり
やゝけしきたつ春のわかくさ

餘寒　　田邊和氣子

春風はふゆふくからややまひめの
かすみのそでにあは雪ぞふる

鏡　　仝

若きより向ひなれたるかゞみにも
いとはれぬべく老にけるかな

歳暮　　久後鈴子

年波のよせてかへらぬなげきをも
わすれて春のいそぎするかな

仝　　仝

たらぬまゝ我身の程にとゝのひて
こゝろのどけき年のくれかな

浦千鳥　　龜谷初子

ありわけの月も氷れるなみまより

友よびかはすうら千どりかな

仝　　仝

夜をさむみ月影さゆる須磨の浦の
さゞなみとほくなく千鳥かな

雨中柳　　内田ゆか子

ねくたれの妹がすがたに似たる哉
はるさめかゝるにはの青やぎ

閑居燈　　海上壽子

影うすく照すもあはれ世をすてゝ
すむやどからの窓のともし火

山春雪　　師岡須賀子

見わたせどまた雪ふれり大日枝や
をひゑの山はかすみながらに

野若菜　旋頭歌　　三輪義方

はるをあさみわかなの數のたらずともよし野づかさの
うめが枝をりてなゝくさにせん

謹みて伏見宮殿下の御凱旋を祝ひ奉る長歌并
短歌　　奥山照子

いはまくはあやにかしこき、天皇のまけのまにまに、武士のますら猛雄を、みを先にあともひたまひ、駒なべて野山ふみわけ、船なべてあら海わたり、もろこしの軍とらんと、あらがねの土もさくとふ、みなつきの照日いとはす、仇どもと打戰へど、仇なせるしこのやつこら、いかでかもい勝あはせむ、燒太刀に切はふらね、大筒にうちくだかね、たまたまにいきのがれしは、ちりぢりににげていにけり、平かにことむけまして、みいづこそかゞやかしけれ、そこにしも守りをおきて、めでたくも還らせましぬ、かしこきや王のみいさを、萬世にたゞへざらめや、あふがざらめや、

天地にひゞきわたれりかへります
きみよろづ代と祝ふもろごゑ



●仁孝天皇の五十年祭　本月二十二日は、仁孝天皇の五十年祭に當らせらるゝを以て、當日午前十時　天皇陛下御靈殿に出御ありて、御親祭を執行遊ばされ、次で親王以下へ拜禮の儀仰出されたり。

●高齡恩賜　從五位鍋島藤陰、同相浦友鷗の兩氏は本年八十歳、從二位子爵梅園實紀、正三位勳二等子爵岩下方平、同稅所篤、正三位押小路實潔の四氏は本年七十歳の高齡に附き孰も思食を以て、去月三十一日御紋附御杯及酒肴料を下賜はりたり。

●故久邇宮殿下の御履歷調　曩に薨去遊ばされし久邇宮朝彦親王殿下は、最初青蓮院宮と號し、後中川宮又加陽宮と改稱せられ、現時久邇宮と申す。明治維新に先ち、王政復古の基業を建てさせ給ひ、先帝に仕へ奉りて久しく補弼の任を盡され、當時、今大塔宮とまで尊稱せられし御方なりしが、去る五日宮內大臣より親王の御履歷調あるべき樣、御沙汰相成りたる旨、御繼嗣邦彥王殿下の許へ傳達されたる由。同邸にては其主任に小藤孝行、同事務員に目賀田榮、角田敬三郎、山口長三郎、同書記長に鳥居小路經友の諸氏を命じ、御相談役には正二位池田茂政、正三位福羽美靜、從三位土肥實匡、正六位山田時章、同內藤耻叟、市來四郎、岡谷繁實等の人々に依囑せられたりと云ふ。

●故能久親王殿下百日祭　去る十二日は故北白川宮能久親王殿下の百日に當らせらるゝに付、當日午前十時御殿に於て御靈祭、同午後二時御墓所に於て御祭典を行はせられしよし。

●御歌會御兼題　都早春(明治廿九年二月五日御兼題)

正風

梅みにと思ひたつころみやこ人
はるにうかるゝはしめなりけれ
承昭

たけしはのうらよりかけて春かすみ
都ひろくもたちろめにけり
詮

仰きみる大城のまつもいろろひて
みやこおはちに春は來にけり
忠敬

打日さす都おはちはいとはやく
はるのけしきもみねそめにけり
光脩

やま遠きみやこおはちはうぐひすの
初音もまたて春めきにけり
長延

うち日さす都のおはちゆく人の
たもとのとかにはるたちにけり
隨光

たちのぼる民のかまどのけふりより
都のろらやかすみろむらん
愛子

千鳥鳴かものかは風さむけれど
みやこおはちろかすみろめたる
文子

うす霞けさたちろめてこゝのへの
みやこのろらは春めきにけり
祥子

さくらたのみはりの氷とけろめて
雲井のとかにかすむけふかな
範子

にきはへる都おはちの朝けぶり
かすみたちろふはるは來にけり
敦子

あら玉のとしはきはてゝ都ひと
のとけきはるやけふむかふらん
道子

鶯はまたなかねともやまとはき
みやこのろらははるめきにけり
いと子

ちゝふねに雪はみねなから打日刺
みやこ大路はかすみたなひく
眞額

けさみれも都れはちにまく水も
こはらすなりてはるめきにけり　　有經

打つれて都にいつるゐなかめか
いろなきころてもはるめきにけり　　正夫

冬かれの柳さくらをうながして
みやこれはちにはるかせぞふく　　胤明

玉しきのみやこのいちにうる梅の
かすそふなへに春をしるかな　　英一

もゝそめし都れはちのわをやきに
春のひかりはまつみゑにけり

●天ノ橋立の變遷　日本三景の一なる天ノ橋立は、護岸工事の完からざるためか、瀬戸の東岸は護岸を蠶食せられ、幾多の古松は次第に枯れて、空しく勝景を損ずるのみ。今にして之が保護を策を講せずんば、終に自然の爲めに破られて、復挽回すべからざるに至るならんといふ。

●占守島海岸の產物　占守島は日本版圖中の極東にして、一葦水を隔たて、魯領東察加に對したる無人島なり。（千島列島三十餘個の中得撫島までは住民あり其以北は無人島なり）該島海岸に如何なる天產あるかは、從來の地理書に詳記せず。依て左に郡司大尉の演說中より拔萃して參考に供す

淡水魚の部。　紅鱒、鰙、鯇、鮇石斑、魚泥瑕

海水魚の部。　鱈、鰷魚、鮃、鰈、河豚、鮔、鮹、石距、鯤魚。平尾魚、鰪、鱂、鯨（小鯨）

貝類の部。　蜊蟶、蝴蜺、海盤車、海螺、梭尾、甗、螺、淡菜、蝛、海膽

海草の部。　昆布、櫻苔、靑苔、紫苔、若菜

海獸の部。　臘虎、膃肭臍、海豹、海馬

水鳥の部。　白鳥、鴈鴨、鵜、信天翁、千鳥、鷺鳥

陸獸の部。　白熊、熊、狐、河獺、野鼠

陸鳥の部。　鷲、鷹、鳶、烏、鴫、鶺鴒、鷦鷯、雀

●醫師の治療の即治し得ざる場合に傍人の行ふべき處置法　　肝付兼行氏の述べられたるものなりといふをきけた

左の諸事變は屡々生起するものなれば其徴候と療法とは常に明知して之を忘るべからず

狂醉(原因)過飲(徴候)酒氣劣々全く無感覺ならず大體患者を呼醒する得鼻妍なし兩瞳子等大に大體膨脹す腦膜は之に觸るれど感ず常温下二三度なる體温脈動弱くして速し(療法)吐劑冷水を頸部に適用し温熱を體面及肢端に適用し

中風(原因)漏血腦に壓を生ず(徴候)患者忽然感覺を爲し搐搦し身體痿ゆ(療法)頭を高めて體を臥かし頸邊の着衣を取去り頭部に氷又は冷水を當て口より一物をも與へず

癲癇(原因)腦の疾病或は錯亂(徴候)搐搦し口に泡吹き舌を嚙み一部に感覺なく呼吸に困しみ脈動正しく顔色青黑し(療法)患者の自から傷害するを豫防し頭を高むべし

ヒステリヤ(徴候)忽然靜かに倒る搐搦或は寧ろ頭及身體の急動一部の無感覺但し外見上のみ(療法)顔に冷水を灑く

失神(原因)衰弱或は衝心(徴候)無感覺青白き顔及唇殆んど見分け難き脈動皮膚上の冷汗(療法)頭と顔に冷水を灑ぎ少量の弱き興奮劑を與へ頭の後に手を置き膝間に頭を壓下す

血毒(原因)腎臟病(徴候)搐搦無感覺筋の捻絡、譫語、呼吸に溺臭あり水腫病の徴候(療法)熱空氣又は蒸氣浴、强瀉劑、頭に氷を當つ

阿片毒或はモルヒネ毒昏迷針頭裡に縮小せる瞳次第に感覺を失ふ但し搐搦或は絶命を來す前に全く之を失ふことなし(療法)吐劑頭と胸部に冷水を灑ぎ歩行運動强き珈琲人爲呼吸流通氣溜より衝撃を加ふ

衝撲(原因)打撲、勞働、恐怖、悲哀、電光の爲に神經系を傷害するより起り或は即死することあり又回復に遲速の差あり(徴候)青白き壓縮せる顔暗鈍の眼殆んど見分け難き脈動甚だ弱き呼吸血循と呼吸の作用は最小度に減す(療法)患者は水平狀に置き血循及呼吸を回復し頭より緊着衣を去り體面と肢端に温熱を適用す興奮劑の小量を注意して與ふるも可なり

腦の激動(原因)頭上の打撃或は墜落(徴候)打傷等なり輕き場合には患者倒れたる儘にて動かす無感覺なり若

て呼醒さは忙かしく應答して又沈默して暫らくして動き始め嘔吐し屢生す重き場合には患者の無感覺甚しくして呼べども答へず顔青白く又冷かに脈動弱く呼吸遲くして溜息す(療法)靜かなる暗室に患者を仰向け少しく頭を高くし體面及肢端を温たむ

腦の壓迫(原因)腦質を壓する骨片又は溢血(徴候)頂骨の挫折の如き頭部の傷害に伴ふものにて中風の症候と同し(療法)又中風と同し

出血　出血は創傷其他の原因により血管の開裂するに起り外部内部の別あり

出血は三種に分たる血の勢ひ強く奔出して其色濃紅なるは動脈出血なり其徐々に湧出して其色暗紫色なるは靜脈出血なり赤色血の體面より漏出するは毛細管出血とす

出血の一般療法押壓は外部出血を止むるに最良の手段にして之を利用するには何れかの骨を抗抵點として之に逆ひ押壓すへし

特別の療法を規定しあらざる體部は皆な場所を直接に押壓して更らに助援を受くるまで出血を止むるを得へし動脈出血は最も恐るへき最も注意すべき出血にして之を抑止するに一秒時も後るべからず(療法)傷を擧し之を撿ため冷水にて洗ひ體を臥かしたる儘にて傷所のみを高め助援を受くるまで血管の切口を直に指にて壓し指又は止血具(枕子及綳帶)にて心臟側の大動脈を押さへ一層安全ならんため傷所に枕子綳帶を適用す靜脈出血と共に起るあり又獨自に起るありて淺創は動脈を切斷するよりも靜脈を切斷し易きものなり患者の足部に靜脈瘤及瘍瘡ある所に恐るべき靜脈出血の起ること多し(療法)創を擧し之を撿ため冷水にて好く洗ひ躰を臥せざる儘にて肢躰を高め創の兩側に枕子綳帶を施し動脈出血を出に治療する場合に非れど血臟側の血循を妨止する緊着衣の如きものを取去るべし毛細管出血は容易に制止せらるべし(療法)出血面を直壓し氷又は明礬「スチール、ドロップス」腐蝕劑等の止血劑を用ゆべし内部出血は動脈瘤破裂の場合を除き各手の來るを待に暇なき程に急劇なることなし(療法)患者を安樂に據り掛らし局部へ或は可成之に近接して氷を當て又口、喉頭、氣管邊の出血には氷を吸込ますこと有用なり

●精神病者を看護する者の心得　なりとて衛生新報にのせたり。

(一)精神病者は精神上の障碍のみならす、通例身體にも病患のある者なれど、此患者の看護に從事する者

は、殊に憫憐を加へて一層他の患者よりも鄭重に介輔せんことを常に銘心して、假令看護者に向て罵詈嘲弄又は暴行を爲すことあるも、能く之を忍ひ終始怠らす温和に之を取扱ふべし。

(二)看護者は精神病者に向て其精神錯亂せることを話す可からす。或は寧ろ害あるも毫も益あることなければなり。且つ患者に信用を失ふことあるべし。時としては其患者を健全の者と看做し取扱ふを可とすることあるものなれば、之と談話するには大に注意せざるべからず。

(三)精神病者は身體又は他人を傷害することあるものなれば、注意して不斷其傍に在て看侍するを要す。又其病室には雜具及煖爐を置くことなく、窓も硝子窓ならさるを良しとす。

(四)精神病者には食物を忌避して假令懇諭するも飲食を欲せざこと間々あるものなり。此の如き患者は遂に饑餓を覺ふるに至れば自ら飲食を需むる者なれは、强て之を勸むべからず。又飲食を貪り充分に咀嚼せずして嚥下する者あり。或は咀嚼し能はず或は嚥下し能はざる者あり。此の如き者にありては其狀を具さに醫師に語りて指揮を仰ぐべし。

(五)精神病者中甚しく着服を嫌ひ、或は飲食の際之を攪亂して不潔となし、其他總て物品を汚穢し不潔となすを好む者あり。此の如き者にありては勉めて身躰を洗滌して清潔となし、髮を梳り清潔の衣服を着せしむべし。

(六)精神病者中思想錯亂し加ふるに五官の機能も變常する者多し。而して或は喋々多言し或は沈默す。但し沈默する所の患者にありては或は他物の一點を凝視し或は一方に熟聽し或は恥辱若くは脅迫を受くるが如き狀をなして室の一隅に潛伏して耳目を蔽ふ等のことをなす者あり。又動もすれば遁逃せんとする者あり。自殺を企つる者あり。此の如きものにありては片時も其傍を去ることなく看侍するを要す。且つ精神病者にして若し小刀其他の傷害し得べき物品を携帶しあらさるや否やを細密に探索し、携帶せることを發見せは直に之を奪ひ去るべし。

●女子高等師範學校入學試驗問題　長野縣にては、本年四月入學すべき、女子高等師範學校生徒撰拔試驗を、一月十五日より十七日迄、縣廳内にて執行せられたりといふ、今其問題を得たれば、

國　語　（二時間）

第一　左の文字に國訓を附せよ
稗、苗、報、踊、前、末、救、致、竿、歟

第二　にとへ、にとをとの差別如何

第三　次の文に於て〇點を附したる動詞の自他を説明せよ
（イ）雨ふれど河の水も増す故に人夫を増して築堤工事を急かせたり
（ロ）道を行きながら花を見る

第四　勢ある者は貪慾深く獨身なる者は輕ろしめらる寳あれど憎れ多く貧しけれど歎き切なり人を頼めど身人の奴となり人を羽ぐくめど心恩愛につかはる世に隨へど身苦し又隨はねど狂せるに似たりいづれの處をしめいかなる業をしてか暫も此身をやどし玉ゆらも心を慰むべき

第五　この泊の濱には種々のうるはしき貝石など多かりかヽれどたゞ昔の人をのみこひつヽ舟なる人のよめる
よする浪うちもよせなんわがこふる人忘れ貝たりてひろはん
といへれど或人堪へずして舟の心やりによめる
忘れ貝拾ひしもせじ白玉をこふるをだにもかたみとれもはん
となんいへる女兒の爲には親をさなくなりぬべし玉ならずもありけんをと人いはんやされどもしにし子顔よかりきといふやうもあり

漢　文　（二時間）

毎字ノ傍ニ讀方ノ假名ヲ付ケ別紙ニ意義ヲ解釋スヘシ

第一　且王者之不レ作未レ有下疏ニ於此時一者上也民之憔悴於虐政一未レ有下甚ニ於此時一者上也飢者易レ爲レ食渴者易レ爲レ飲孔子曰德之流行速ニ於置郵而傳レ一命當ニ今之時一萬乘之國行ニ仁政一民之悅レ之猶レ解ニ倒懸一也

第二　兄弟者分レ形連レ氣之人也方ニ其幼一也父母左提右挈前襟後裾食則同レ案衣則傳レ服學則連レ業遊則共レ方雖レ有ニ悖亂之人一不レ能レ不ニ相愛一也及ニ其壯一也各妻ニ其妻一各子ニ其子一雖レ有ニ篤厚之人一不レ能レ不ニ少衰一也娣姒之比ニ兄弟一則疎薄矣今使ニ疏薄之人而節ニ量親厚之恩一猶ニ方底而圓蓋一必不レ合矣

國語作文　（二時間）

第一　水　平易なる詞を以て作るべし

第二　借用せし書籍を返す文　普通體に傚ふべし

本邦歴史　（二時間）

第一　大臣大連は何時定置せられたる者なるか又其の朝權を擅にせるは何の因由に本づけるか

第二　大化の改新制度は封建を郡縣となしたる者なりと謂ふ如何なる改革を指して然斷定するか

第三　豪族とは如何なる者ぞ其の發生したる因由は如何

第四　足利時代に沸亂の止まざりしは何故なるか

第五　徳川幕府が天下の治平を維持したる政略は如何

算術　（二時間）

第一　乘法とは如何なるものなるか

第二　或數が素數（單純數とも云ふ）なりや否やを知る方法並に其の理由を記せ

第三　$\sqrt{19}$ を第五小數位まで算出せよ

第四　我が銀貨壹圓に付きロンドン參着が二志一片四分の三なるときは七百五十八磅は我が銀貨何圓なるか

第五　或人金若干を若干の年利にて貸附けしが七ヶ月の終りに計算すれば元利合計は金貳百九拾四圓貳拾五錢と成り十五ヶ月の終りに計算すれば金三百拾六圓貳拾五錢と成ると云ふ由て元金と利率とを求む

（注意　第三問に就きては運算の順序を明にすべく又第四第五の二問に就きては解法解式、運算、並に答を明記すべし

●飛鳥の速力　方今の鳥類學者中に、其人ありと聞えたるガトケ氏の計算に據るに、季候に隨ひて土地を移す飛禽の中には、一分間四哩の速方あるもの尠からず。是れ殆んど信ずべからざるはどのことながら、又事實なるに似たり。ブルースロートといふ鳥は、中央亞弗利加に冬を過し、春暖を待てヘリゴランドに歸るに、黄昏彼地を發すれば、黎明には已に此地にあり。此距離實に一千六百哩なり。ガトケ氏は五十年の間、ヘリゴフランドにありて、飛鳥の研究に從事せる人にて、其說といへば、學者の間に非常の信用あるなり。

●段通職工の教育　大阪府下にては、各製造所の増設日を追ひて頻繁となり、隨て之に雇用せる職工は

極めて夥多なるより、此等の職工に一々教育を施行せんとするは、頗る難事なるが、昨年二月中旬、學齡兒童を主として雇用せる一般の段通工場に、職工教育を施行したるに、僅々一周年間の成蹟に據りて之を見るも、其結果極めて良好にして、從來目に一丁字あらざりし者も、讀書、算術、習字の一通を習得し、且自然感化の功によりて職業に勤勞することも著しきを覺ゆ、而して現今同機屋の數四百八十餘にて、此の教育を受くる職工、二千四五百名あり。教員の數十名、一ケ月二時間の割合にて、各機屋を巡回教授する仕組なり。經費は二ケ年一千圓、內五百圓は同組業合より支出し、殘額五百圓は市費より補助せらるものなりと云ふ。

●大日本婦人教育會常集會　去る十五日午後一時より內山下町華族會館に於て同會常集會を開き、文學士宮本正貫氏、坂正臣氏の講演あり、並に正副會長及び議員の改選を行ひしといふ。

●東京府高等女學校　去る十日類燒の災に罹りたる東京府高等女學校(築地南小田原町所在)にては、即日より、東京府廳の第三課內に、假に事務所を開きて、執務し居られしが、諸事稍緒につきたるを以て、取り敢へず、神田區今川小路二丁目なる專修學校を借り入れ、十七日頃より、授業を始むるの手筈に運びたる由なるが、元來同校は、先年來入學生徒追ひ〳〵增加し、從來の教室にては手狹にて、教授に差し支へを生ずるに至りしより、舊臘、小松宮御息所殿下より、同校の趣旨を嘉みせられて、下賜せられたる、赤坂區三年坂御用邸建物の一部(建物坪數百六十坪)を、神田橋外舊區役所跡に移し、更に百餘坪を新に建て增し、五月下旬迄に竣工の筈にて、一大校舍を建築すべき計畫整ひ大倉組に於て受負ひ、三年坂の建物は、既に取崩しに取り掛り、神田橋の方は、地平しに着手し居る際、今回の變災に出遇ひたるものなれど、目下頻りに、工事

を取り急ぎ居るといふ、尚ほ來る四月より新學年の入學生徒は、例年の通り、今川小路の假校舍に於て募集する由なり、蓋しこの學校は偏せず黨せず、中庸の主義を採り、良妻賢母あるは教員をも養成するに適すれば、追日隆盛に赴かんは、自然の理にして亦國家の幸なり。

●女文學者若松賤子逝く　明治女學校々長巖本善治氏の配にして、夙に女流小説を以て、明治の新文壇に知られたる巖本かし子(雅號若松賤子)は過日來肺患にて久しく蓐に在りしが、天年を假さず、去十日遂に逝去したりといふ。

●外國語の轉訛(承前)

雜部

(一)往時休日の事をドンタクと謂ひしは、蘭語の Zondag 即ち日曜日より轉訛せしなり

(二)往時切支丹宗(耶蘇教)の宣教師をバテレンと稱せしは、葡萄語 Padre の轉訛なり

(三)瀝青をチャンと云ふは、英語 Chian Turpentine の轉訛なり

(四)貨幣の數量にドルの稱あるは、英語 Dollar の轉訛なり

(五)十二の數量をダアスと云ふは、英語 Durten の轉訛なり

(六)電氣をエレキと云ふは、英語の Elector に由來す

(七)石鹼をシャボンと云ふは、西班牙語の Xabon 佛蘭西語の Savon 等に基つく

(八)化學を往時セイミ(舍密)と云ひしは、蘭語 chivie の轉訛なり

(九)船長を甲必丹即ちカピタンと云ひしは、蘭語 Capitein に由來す

(一〇)耶蘇教を往時切支丹即ちキリシタンと云ひしは、西班牙語 Christian に由來す

(一一)隧道をトンネルと云ふは、英語 Tunnel の訛なり

(一二)玲瓏なる色彩を瑠璃即ちルリと云ふは、素と梵語にして透徹の義なり

(一三)至尊の御坐所をアングウ又はアンザイと申し奉るは、行宮行在の宋音なり

（一四）寺院即ちテラは、朝鮮の古語てるより轉訛せしなり

（一五）閼伽即ちアカとは、梵語にて佛に供する水の義なり

（一六）讀經をカンキンと云ふは、看經なる文學の唐音なり

（一七）音聲の上がることをカンと云ふは、甲の字の唐音なり

（一八）漆喰即ちシツクイとは、石灰の唐音なり

（一九）一意專心なることを何々三昧即ちサンマイと云ふは、梵語なり

（二〇）人躰の乾稿せしものをミイラと云ふは、英語のMummy なるを支那にて木乃伊（もののい）と譯せしに復たミイラと訛傳せしなり

（二一）矮雞をチヤボと云ふは、占城（ちやんぱ）國より渡りしに因ると云ふ

（二二）塗料に用ふる假漆をワニシと云ふは、英語のVarnish より訛りしなり

（二三）庭園等に於ける小屋をチンと云ふは、亭の字の唐音なり

（二四）疾走するを韋駄天即ちイダテンの如しと云ふは、韋駄天とは佛法守護の神にして、或る時魔王、佛舍利を奪ひ去らんとせしに、此神疾く馳せて奪ひ返せしことあるに因ると云ふ

（二五）番瀝青をペンキと云ふは、蘭語のPik より訛りしなり

（二六）斤量にポンドの稱あるは、蘭語のpond に因る英語にてはpound なり

（二七）射利などの行爲ある僧を罵りてマイスと云ふは賣僧なる文字の宋音なり

（二八）寓意的の戯書をポンチと云ふは、英語Pnnch（滑稽者）に因る

（二九）女僧を比丘尼即ちビクニと云ふは、ビクとは梵語の僧と云ふ義にして、女なるが故、尼の字を加へて斯く稱するなり

（三〇）僧を和尙即ちオシヤウと云ふは、梵語のオハシヤキヤにして僧位なりと云ふ大和尙は法印に同じく和尙は法眼に同じ之より轉じて僧の意に用ゐらる

（三一）覇王樹をサボテンと云ふは、石鹼（サボン）（今ハシヤボント云フ）の如く、油染したるものを能く除き去るの効あるに因るなり

（完）

教の庭

二月二十日　兼題　遠山霞（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　備後奴可郡八鉾村　大堀梢子

はのはのとあけ渡りゆくとほやまに
のとけさろへてたつかすみかな

地　埼玉縣大里郡佐谷田村百九十七番地　福木久仁子

きのふまて近く見ねつるふしのねを
とはくなしたるはるかすみかな

人　播磨龍野　川津木久子

けさみれはいよ〳〵遠くなりにけり
をちのやま〳〵かすみへたてゝ

春かすみたちそめしよりさほやまの
かけさへけさは見ねすなりぬる　住山靜子

春かすみたな引くかたにこもりくの
をはつせやまのかれきこゆなり　木本千代子

咲く花はみれかふもさかみねぬまて
かすみわたれりをちのやま〳〵　羽田三緒子

むさし野に若なつみつゝみわたせは
のとかにかすむさほやまのみね　河田いし子

春されはあらそひかれてゆきなから
かすみそめたりかひのさほやま　永井さい子

立ちのほる朝日のかけにみれつゝき
かすみにけりなはろのさほやま　日苗友子

ほの〳〵と霞みそめたるさほやまの
はるのけしきはのとけかりけり　島津俔子

つくばねもちゝぶの山もはるかすみ
ひとついろにぞたなひきにける　佐々有鄰子

軒ちかくあふきなれたるおもかけも
かすめはさほしふしの志はやま　河野文子

見わたせは夫かあらぬかほの〳〵と
かすみそめたりはるのさほやま　磯部つや子

さほ姫のかすみのころもほすなへに
かくれてみねぬをちのやまやま　靜間みつ子

春かすみ立ちなかくしそつれたにも
さたかにわかぬをちのやま〳〵　名取正代子

ちかきより遠きにまさるやま〳〵の
けしきいやますゆふかすみかな　星野かづ子

遠やまのさくらかまれのきぬの上に
かすみのころもかけてけるかな　丸山須磨子

見わたせはさほやま松にさほひめの
かすみのころもかけてけるかな　鈴木美惠子

今朝見れは遠くかすみの立ちこめて
目なれしやまもたさられにけり　牧野時子

さほ山のみれのみゆきは見ゆれとも
ふもとはふかくかすみこめたり　進藤元子

なかむれは秩父かひかれはるきぬと
まゆひくはかりかすみそめけり　住山幾子

浪たゝぬうみちへたてゝうら〱と
かすみそめたりおきのしまやま　川崎みき子

きのふまてましろにみねし嶺もなし
今さはかすみににほふさほやま　西村さら子

夕まくれいく重かすみの立ちつらん
さほのやまのはかくれはてたり　濱口奈保子

しら雲のあとなくはれしさほやまに
けさはかすかにかすみたなひく　濱口信子

はるくれは色こそまされさほひめの
おれるかすみのなひくさほやま　神田靜子

白ゆきのあとなくなりしさほやまに
このころかくるはるかすみかな　町田貞子

つれたにも遠くみねつるやま〱も
かすみかくれになりにけるかな　大島あい子

なにとなく春はかすみの立ちこめて
さほのやま〱みねかくれする　神田春子

ひさしほのなゝめも消きこのあさけ
さほきやまのはかすみそめけり　浦島龜子

あつさゆみはる立ちくれはさほ山も
今さはのさかにかすみそめたり　水島良子

さほやまの朝日うららにうすかすみ
にほふをみれははるはきにけり　吉川國子

さほ山はかすみのころも着つれとも
こゝにははるもなのみなりけり　西村菊子

さほ山はおもひしよりもかすみけり
はるになりぬときゝしはかりに　松井佳子

あつさゆみはるとしいへはさほ山に
さきたちわたるうすかすみかな　根岸英子

はるきぬといひしはかりにさほ山に
けしきを添へて立つかすみかな　春木繁子

かすみ立つさほやまを見わたせは
かせさむれけとはろうしらろゝ　荒木すま子

さほ山のゆきは去年にもかはられと
かすみそそむるはるのしるしに　近藤秀子

みわたせは積るゆきたに身にしまん
さほのたかれにかすみそめけり　荒井奈美子

あしひきの道のたかれに立ちこめて
にほふかすみやいく重なるらん　澤田俊子

立ちそめし道のたかれのあさかすみ
けにうつしゑはかきりありけり　吉川禮子

ふるゆきのまたきねやらぬさほ山に
たな引きそむるはるかすみかな　白井たま子

しら峯はつもりし去年のまゝなれと
さほのやまのはかすみそめたり　遠藤錦子

ゆきもやゝ打ち烟りつゝさほやまに
かすみ初めたるけさののとけさ　小川糸子

あくるよりむらさきたちてさほ山の
　みゆるやかすむはじめなるらん　松原ゆか子

見渡せはかゝみのやまは見ねなから
　かすみこめたるはるのあけぼの　小野田くに子

武藏のゝはゝこもいまた摘まなくに
　ふじのたかねはかすみそめけり　宇田川よし子

雪つもるちゝふのみねのうすかすみ
　たな引きそめてはるはきにけり　岩崎ふく子

ふりつもる雪さへ消ねぬふじのねの
　かすむあしたやはるになりけん　小野田ひで子

見渡せはやまのすかたもわかぬまて
　今朝のどかにもかすみそめけり　小玉きん子

たゝこねに春はきぬらんやまさりの
　尾の上はるかにかすみたなひく　宇田川うめ子

玉くしけはこ根のやまは見ねなから
　かすみそめけりはつはるのそら　貫井そめ子

足からやはこ根のやまを見わたせは
　かすむあなたやはるになりけん　小野田さく子

うすかすみひさ重ひきけり佐保姫の
　かつらきやまにはるやきぬらん　小野田かま子

ふれはつるつしまの浦のあまなきに
　からやまゝゆもかすむはるかな　畠山千代子

けさ見れは松はらさほくなりにけり
　なすのそさやまかすみそむらん　畠山ゆき子

淡すみのふよりうすくや見ゆるらん　齋藤ふん子

　かすみこめたるあはちしまやま

あつさゆみ春やたつらんうらうらさ
　さほやまのはにかすみたなひく　德永萬壽子

みわたしのさほ山のはもはるめきて
　かすみそめたるさまそのさけき　佐々小季子

すみた川みなかみさほくみわたせは
　かすみたなひくつくはねのやま　神田榮子

春かすみたなひきそめてうら／＼さ
　あさ日ににほふふしのさほやま　曾山道子

うくひすの聲つりいてしあしはより
　さほのたかねはかすみそめたり　松原常子

あつさ弓はるの氣しきのいちしろく
　うすかすみせりさほのやまのは　野田千代子

うすかすみをちのたかねに棚ひきて
　ほるさはしろきこのあさけかな　橋和子

雪つもるさほのたかねもいつしかに
　はるのかすみの見ゆる今日かな　中島房子

雪はまたさけもあへぬにさほやまの
　今朝はかすみのみねそめにけり　木村鉄子

珍らしさ見初むるほさになりにけり
　ひらのたか峰にかすみたなひく　成田つれ子

あさほらけ霞のたかれに引くまゆは
　はなにまかへるかすみなりけり　芝田秀子

はゝ立つさいひし斗りにさほやまの
　ゆきうちとけてかすみたなひく　神田鈴子

まち〳〵し春のしるしとあしひきの
　さほやまのはもうすくかすめり　大森[illegible]子

つらなれるさほやま眉も今朝みれは
　はやくもはるのうすかすみせり　荒川靖子

うくひすのなき初しより今朝みれは
　さほのたかねに立つかすみかな　越山雪子

おきいてて嬉しきものはさほやまに
　はやくもたてるかすみなりけり　長島綾子

さゝなみやひらの高ねはゆきなから
　さほゝゆつくる今朝そうれしき　長島諒子

はるされは高ねはいまたゆきなから
　かすみのおくになりにけるかな　長島實子

去年の雪また消ねやらぬさほやまに
　かすみはいつかうすくかゝれり　近藤學子

うら〳〵とかすみに匂ふさほやまに
　のほるあさひのかけそのとけき　岡田沙子

はるくれはみとり色ますさほやまに
　かすむけしきものとけかりけり　遠藤登勢子

昨日まてさやかにみねしさほやまに
　たな引きかゝるはるかすみかな　西村芳子

しなかはの海なへたてゝなかむれは
　のとかにかすむあはのさほやま　小川富子

佐保ひめのさほ山まゆのうすかすみ
　のとけきはるをしらせ初めけり　甲斐莊ゆふ子

こく淡くかすみのころもよそひつ
　さほのやままゆほゝゑみにけり　河野多加子

打ちわたすをちの山のはたちこむる
　かすみやはるのころもなるらん　河野八重子

かゝみ山おもさしのみをほの見せて
　かすみにくもるはるのあけほの　鹽田學子

ほのかにも見ねわたる哉ゆふ日かけ
　にほふかすみのおくのたかねは　本多濱子

しろたへの富士の白雪のこしおきて
　すそ野はるけくかすみそめけり　山本きよ子

我かいほはまた冬かれしいろなから
　をちのやまへはかすみそめけり　藥師寺ゆき子

大そらはいよゝまちかくなりけらし
　かすみこめたるあはちしまやま　岩城まつ子

風さねてはるのいろさも見ねれとも
　をちのやま邊はかすみたな引く　岡やす子

さほ山のたかねをわきておつる日の
　ひかりにゝほふはるかすみかな　服崎うき子

眺めあきしさほ山なからやへかすみ
　そらものとかにたちこめにけり　兵頭さきか子

峯いくへやままたやまをたちこむる
　かすみやはるのすかたなるらん　兵頭章子

まゆひきのかづるの山はわかぬまて
　かすみのそでをかさしつるかな　兵頭米子

春かすみたなひくままにうすくこく
　さほやままゆのみねつゝかくれつ　武田粲子

大きみのめくみのはるにおくれしと
さほやまのはもかすみそめけん
松井喜代子

はるかすみたなびきそめて此あさけ
いさゝはるかにみゆるさほやま
土肥仙子

遠やまはのころみゆきのなかなかに
はやくもけさはうすかすみせり
山田久子

消ね残るゆきとひとつにうらうらと
かすみてとほしきひのなかやま
山田ゑい子

かすみたつ遠きやまへはほの〴〵と
はるたついろそのとけかりける
小幡富み代子

遠やまをふかくかすみはおほひけり
をのへのまつをそらにのこして
小幡千代子

をちかたのめなれし山もはるかすみ
たなひくけさはめつらしきかな
大竹治子

信濃なるあさまのやまの八重かすみ
ひと重はのほるけふりなるらん
福木利家子

佐保姫のゆたけきそてやおほふらむ
いさゝとほくも見ゆるやまかな
矢野うめ子

さほ山はあるかなきかにかすめとも
ゆききはぬこそうらみなりけれ
南大路正子

あしたかの山はかすみにおほはれて
富士の峰しろきはるのうへかな
南大路芳枝子

さほ姫のほすやかすみのころもきて
かけかすかなるはるのさほやま
錦部志う子

しらか山かすみのそてにおほはれて
津田徳子

ほの〴〵みゆるみねのわかまつ

うちなびき春のながめやくもるらん
かすみわたれるをちのやま〳〵
仁井田富子

さほ姫のかすみのころもかけにけり
のころはやまのふもとのみなり
大久保壽貞子

淺みどりかすみたなびくをちのやま
みゆきのころもぬきかへにけり
石津たね子

見わたせは遠のやま〳〵うちかすみ
はるのすかたはのとけかりけり
佐治ふさ子

あさまたきみわたすをちの山の端に
ねもいひしらずかすみたなびく
大久保うた子

富士のねのふもとに續くあしひきの
やまもみとりにうちかすみけり
小町谷りね子

いひしらぬ景色なりけりうら〳〵と
かすみたなひくはるのさほやま
小町谷園子

はるきぬと皆くるかすみは七重八重
まづさほやまをかくしそめけり
中野八重子

さほ山はかすみのそてにおほはれて
おほろにみゆるはなのひさむら
山崎しづ子

たに〳〵に峯のまつばらみゆるかな
はるのゆふべにかすむさほやま
碓井信子

うら〳〵とかすみにけりなはるの山
とほきさとよりみねわかぬまで
碓井武子

はるかにもかすみたなびき遠やまは
みわたすかぎりはるめきにけり
碓井和可子

ほの〳〵と遠方の山へのなのへより
なひきそめたるはるかすみかな　平澤ふさ子

しら雪とのみみしなちのやまのはも
かすみにけりなはるのあけぼの　山本澄江子

遠やまはかすみこめたりさほひめは
はなのしたひもいまやとくらし　師岡千代子

さほ山の木の芽もいまやはるきぬと
もゆるけふりやかすむなるらん　三笠鶴子

よしの山かすみはふかく立ちそめぬ
はなのさかりやちかつきぬらし　三笠友子

ゆたかなるみよのすかたの眺めなり
かすみこめたるはるのさほやま　花山保江子

それかとも見え分ぬまてかすみたち
はるのさほやまゆたにみえけり　花山操子

はるかなる山のけしきをみわたせは
たゝひとむらのかすみなりけり　北村貞子

くれおそき春のひかけのうら〳〵と
かすみたなひくあはのさほやま　松尾蓮子

春かすみたち初めしよりつく波やま
いよいよとほくなりにけるかな　太田貞子

遠やまにはるのゆるしのいろみせて
しるしはかりのはつかすみかな　大島綾子

いくちよの春をこめてかはるかなる
ふしのふもとにかすみたなひく　樋口のぶ子

久かたのうらものとかにさほやまの
かすみのころもたちそめにけり　筧清子

ゆめのまに春はきにけりさほやまに
ゆきとみまかふかすみたちつゝ　筧光子

うら〳〵とかすみたなひき遠やまの
たか根のさかにはるはきにけり　篠賀俊子

つもりてし野邊のみ雪のきえぬまに
かすみそめたるさほやまのみね　遠賀花子

ひさかたのくもかあらぬか夕かすみ
おほろににほふなちのやまのは　山根久子

目なれてし不二の高嶺もわかぬまて
くもゐのおくにかすみたちけり　青木辰子

遠かたははるのけしきにかすみつゝ
ほのかにみゆる不二のしらやま　舘脇ます子

こゝろあてにむかふ筑波の山の端の
そこともわかすかすみこめたり　池谷富子

つくはねの峰もかすみて見えぬかな
あさな〳〵立つふかきかすみに　大谷琴子

すみかまのけふりの末にさほやまの
みねもふもともかすむはるかな　杉浦糸子

あつさゆみ春のすかたやこれならむ
かすみににほふなちのやま〳〵　諸井久眞子

遠かたのやまもかすみてうら〳〵と
のとかに見ゆるそらのいろかな　吾妻近子

めなれつるさほ山の端にはるかすみ
かゝるけしきものとけかりけり　山本糸子

をちこちの山もかすみのとぢこめて
ほのかに見ゆるふしのいたゞき　小笹根　しう子

かすみたつ朝もゆふべもかけたかく
ほのかに見ゆるとほきやまかな　牛谷　いく子

春かすみたなひきそめてとほやまの
すかたもけさはたちまさりみゆ　松下　よし子

みわたせはひらのたかれに春たちて
ゆきと見るまてかすみこめたり　北村　孝子

ゆきにみし遠のたかれもはるたちて
かすみのうちとなりにけるかな　北村　正枝子

ひさかたの雲井とはかりまかひけり
かすみたなびくとほやまのかけ　大久保みち子

きのふまて雪降りつみししまやまも
けふはかすみのおくとなりけり　鶴見　貞子

あなやきの木のまに見えし雪きえて
みとりにかすむこしのしらやま　前澤　幸子

あつさゆみ春のけしきになりにけり
かすみたなひくよものとほやま　粟田口信子

程もなく我が住むさともかすむらん
とほやまうすくかすみ初めたり　久門　利惠子

天つそらみとりもふかくうらゝくと
かすみにけりなこしのとほやま　後藤　信子

春の日のかすみのうちにこめられて
たかれのゆきはきえんとやする　深澤　美惠子

春かすみたなびきわたるたえまより
なほもののさかにみえわたるかな　續木　かめ子

薄くこくあしたのそらをあやなすは
ほのかにそれととほやまの見ゆ　木村　松子

はるの色ほにあらはれてとほやまの
これとほやまのかすみなりけり　田中　とみ子

きらぬたにはるかにみえし山のはな
かけはかすみにしつみけるかな　眞鍋　直子

立ちわたるかすみの袖につゝまれて
けさはへたてゝたつかすみかな　重松　たか子

きのふまて雪にうもれしとほやまも
見えすなりぬるをちのやまの端　中川　浪江子

春といへは遠のやま邊のしらゆきも
けふはかすみにまたかくれけり　下元　もと子

うつめても雪には見えしとほやまを
けふはみとりにかすみそめけり　野中　あさ子

とほ山なきのふもけふもたちこめて
さなからかくすはるかすみかな　久松　せい子

さらてたにそれともわかぬとほ山を
うこかぬものはかすみなりけり　中村　のぶ子

ほのほのと遠のなみまにかけ見えて
なほたちかくすはるかすみかな　奥原　ふく子

うらゝくとかすみたなひくをち方の
かすみたなひくおきつしまやま　高田　まさ子

春かすみたちへたつれとよものやま
やまのけしきそなかしかりける　續木　かめ子

みわたせは夕日かけろひほの〴〵と
さほやまのはにかすみたなひく　小笠原　きぬ子

山のはなふりさけ見れははるかすみ
そこともわかすたちわたりけり　梅原　ふて子

あふき見るよしのゝ山ははなならて
やへのかすみそたなひきにける　土岐　米子

たらちねのめくみあふけはいや高き
さほやまもさもかすみこめけり　宇野　きよ子

はなもなき道のたかねないかなれは
ふかくかすみのたちかくすらん　林　久子

あすはまたあめとなるらん風たえて
かすみにくれしをちのむらやま　廣田　とめ子

志賀の浦やなみもしつかに春たちて
かすみたなびくひらのとほやま　大海原　芳子

たちわたるくもかあらぬか遠やまの
ふもとにかすむありあけのそら　藤林　ます子

見波せはちゝふ甲斐かね立つかすみ
かきりも見えすたな引きにけり　長谷川　愛子

ほのかにも雲ゐにみゆるつきやまを
おほろになしてたつかすみかな　中田　徹子

しら雪のかむりをぬきてをちのやま
けさはかすみのころもきにけり　佐藤　誠子

春かすみくも井にまかふあつまやま
まださりかみのやまのしらゆき　卜藏　發ゑ子

見わたせば門田のゆきもむら消ゑて
はるかにやまはかすみたちけり　卜藏　登嘉代子

はるかなる山はかすみてきのふけふ
ゆきふるさともはるかせぞふく　卜藏　こま子

峰いくへかすみのおくにこもるらん
なかめはるけきはるのあけほの　松野　みさを子

ほの見えし富士の高ねもきのふけふ
かすみにこもるはるのあけほの　牧村　ちよ子

なかめやる遠のたか峯のしらゆきも
おほふかすみにきえやしぬらん　内山　こさじ子

きさらきのうらにならひてさほ山も
かすみのころもいまそきにける　上柴　きぬ子

しは人かたくすみかまのけふりより
かすみそめけんよものとほやま　本鄕　尾花子

今朝みれは淡きすかたのころもきて
さほやまひめはまゆつくるなり　青木　春子

み渡せはかひのたかねもあしからも
おなしみとりにかすみこめけり　彦坂　尊子

かすみ立つはるの山へののさけさに
きえのころゆきも花かとそ見る　岡田　もみち子

さほ姫のかすみのころもたちかされ
さほやままゆも見えすなりけり　諏訪　晴子

うら〳〵と春日のさとのさほやまに
けさめつらしくかすみたなひく　境田　丸子

海はらにうかふしまさもひさはみん
かすみたなひくけさのとほやま　黒澤　榮子

さほ山ははなやにほふさみるはかり　おくゆかしくもかすみけるかな　田賀愛子

あさひかけのほる外山もうらくと　かすみてみゆるはるのあけほの　會田惠美子

つくはねのおろしはなほも寒かれと　よものさほやまかすみそめたり　内田たけ子

さきしらぬふしのたかねの白ゆきを　けさはかすみのうちかくしつゝ　内田はる子

二月廿日　兼題　紀元節

天　長野縣長野町　太田貞子

かき數ふ三つの祝ひ日とたゞへまつる此の二月の十一日は國民のもとも祝ひ奉るべき日なりかしこくもみれや神武のみかどにはけふの此の日をもて葦原のくぬち安らかに平らげたまひて橿原の大宮所に御位をふませ國の基をかためさせたまひつるなり去るをろの定めましつる大御日嗣のよゝかはりなく立てましつる國のみはしらのつゆ動きなくて今年ははや三千とせにもま近うなりぬまして今は又國の境もいやますくにひろごりもてゆきつ御稜威の風いよゝ吹き渡る御代にもなりぬるを世にもまさぬすめみれやも神かけりみろなはしたまひて打ちよろこぼせたまふらんなされど國の民草けふのよき日を祝ひまつるとともにいよく深き御惠のほどをれもひかの門に立てなめつる旭の旗の赤き心に出でろが朝風に靡く心を心にて一筋にみかどへに盡しまつろひ國の御杜かためまつりて日影の旗手葦原ならぬ國の果迄輝きわたり今日の大み祭日八洲の外の手振ともなりなん日をいかでか祈りまつらざるべき

地　播磨龍野　眞鍋直子

雪にそひゆる高千穂のと幼き童のもろ聲にいさましう諷ひわけたるは二月の十日あまりひと日紀元節をいはふにろあるけにや國といふ國の限りを盡してもろの類なき三千年にちかきむかしより八千代をかけてうごくことなき天つ日つぎのいとも尊きわが大君をいたゞきたいまつりこの世界に比類なき端穗の國とさへ名にれふこのたのしき國にやすらけくすみなすはまことに我くの幸とところいふへけれけふはかの橿原の宮に初國しろしめすと天つ日繼の御位につかせ給ひしいく日のたり日にていともうれしき日なりけりされはわきまへしらぬ幼き人までも御國こぞりてよろこひいはふも人の國にはころのためしなき事といとくうれしくて

人　出雲國飯石郡三刀屋町　奥原ふく子

うらくと昇る朝日何となうけはひ勝りて門毎にちち

なびく國旗も一ときは見はゐわるやうに覺ゐ千代に八千代と歌ふなる童等の聲々は鄙の山里にもひゝきて勇ましくもまた樂しけなり實にや今日は二月十一日にてかしこくも皇祖神武天皇の中つ國を平げまして橿原の宮に大み國の基を立て給ひしいともめでたき祝日なり建國以來二千五百五十六年の久しき間埴安の池の面よりいや廣き大みめぐみに四方の民草をうるほしたまひ高千穗山のいや高き大みいつは高麗もろこしまで照りわたりぬまして今年は新たなる領地をさへ開かれて大御稜威ははるかなる西の國々にまでてり輝きぬかゝる尊き國にうまれいともめでたき大み代にあへるもの誰かは兩陛下の萬歲を祈らざるべき誰かは國運の擴張を祝はざるべき

かしはらの昔おはゐて昇る日の
いや榮ゐゆく御代ろたのしき

佐々有鄰子

久方の天の下の靑人艸のおしなめて皷うち笛ふきて神代のむかし橿原の宮に天皇の位に即きたまひて大八洲國を治めたまひ隨在天神の道を豊秋津洲にしきほどこしたまひ百千萬の歲までもうごくことなき神の正道をしきたまひし生日の足日なれば旭の旗を押立てかくうたひまひかなづろことのいさいさかしこきや

堀谷よしゝ

わかすめらみことの御先祖にあたらせらるゝじんむ天皇ちうげんをたひらげさせみかどのみくらゐにつかせたまひしは辛酉のとし二月十一日にしてわかすめらみくにの紀元のはじめにぞあるそののちほしをかされしもをへぬること二千五百五十六とせのけふにいたるまでとつくにひとのあなどりはゆめうけしことなくげにうつくしきみくにからにこそましてとつくにの紀元より六百六十とせあまり六とせのさきにみくにをたてさせたまひしなどげにめでたしとも〳〵めでたきみくにをたてさせたまひしよき日をまんおくとせにすめらみくにのたみぐさにわすれさせまじとて上はやんごとなきがた〳〵より下はしづのふせ屋にいたるまでいはひまつるになんされはこのよき日からないはひまつるとともにあめつちのごときはまりなきすめらみことのおんとかねないのりまつることはよのたみぐさのかたときわするましきことにこそ

畠山千代子

さしのぼるいともさやけき朝日影の家毎に立て迹れたる日章旗にかゞやきわたりていともものどかに見ゐたるはわが皇室の御祖先にまします神武天皇の紀元節を祝ひまつるにてぞありけるそも此の天皇の天つ御神の詔勅をうけたまひて一たび天が下をしろしめし諸國を平げ服して我が日の本の基礎を立てたまひしより今日に至るまで迹綿として少しも外國人の爲に冒されたるが如きことなくいや榮ゐに榮ゐゆくはひとへに天皇のみいづにぞあるされば妾等嫐だみのかくものどかにたひらけく治まる御代にあひてあつきめぐみの露に霑ひ何たらぬわざもなく活しゆくも實に天皇の賜ものなりかし世の小女子等嫐を能く心にきざみてかばしも忘るゝ事なく國の恩にむくいまつるこそ我がくにたみの本分なれゆめ忘るゝな少女ともほゝとめよや少女たちいさゝか思ふよし

を書きしるして紀元節を祝ぎ奉るになんあなかしこ

河野多加子

あなたのしやあなよろこはしや都も鄙も尊きもいやしきもみなおしなべて女子までも學びの道に入りて敎へを受くるこそおのがしゝ心のまゝなるみな御代の御恩にこそそも〳〵我あし原の瑞ほの國は申すも畏き事なから皇祖天津御神の造りなし玉ひしうつし國にして皇御孫神日本磐余彦天皇は天津神の御統にしあれは諸のまつろはぬ醜の族をうちきため玉ひ事やはし玉ひ天皇の大御基を定め玉ひて大和橿原の宮に事あけ玉ひしより今年までは二千五百五十六年とは數へきたれり今日はしも二月十一日にしてあたかも紀元節の祝日なりあなよろこはしあなたのしや大君の御稜威はいよ〳〵四方にかゝやき渡り國の境もいと擴りて今年の今日は例の年の今日にうち勝りていとゞうれしく楽しきかぎりになん

高光る天津日つぎをあふぎつゝ
　國の外まで御代祝ふらし

名取正代子

あふぎまつればはや三千年のそのかみかけまくもあやにかしこき我皇帝の御遠祖神武のみかど日向の高千穂の宮にいまして御みみづからみいくさをひきゐたまひもろ〳〵のゑみし等を平げ給ひて遂に大和國のかしはらの宮に大御位につかせ給ひ天つ日嗣の千代萬代にうごきなきもとゐをさだめさせ給ひしそのみいさをいかで〳〵ゆめわするべき實にまをすもかしこかれど天つ御神の一たび天か下をしろしめし給ひしよりけふが日まで代はもゝはたちの久しき間いさゝかのさはらんものもなく一系の　皇帝しろしめし給ひしめでたきやしまの海のかぎりなき大御恩の露にうるほふ民草は日に〳〵さかはゆくめでたきよろづの國にはたぐひなしとかやげに我國人のほこるも理なりかゝるめでたきもとゐひらかせ給ひしその日にあたるけふの日いかで〳〵ゆめわするべきされば此日をなん紀元節とて大御酒をかみにさゝげつゝ門毎には旭の御旗立てならべ都はさらなり山の尾にすめる山かつ汐くむ海士にいたるまで遠つ御神の御恩をあふぎまつりかつは大君の千代に八千代に限りもあらでさかえませと或はうたひつあるはまひつよろこびてほぎたてまつるになん

山本澄江子

歳月は湍なれども今年より芽出たきは無く月日は多しといへども今日よりうれしきはなし二千年の其昔神武の御門の御位に即かせ給ひしより以來ひじりの帝櫻の木の彌つぎつぎにあれまして青人草を愛で給ひ惠みの敷波八しまにあふれ國の稜威は四方にかゞやきて台灣さへ版圖に収まる芽出度さは皇御祖の尊もいかに思召しめすらん千五百秋瑞穂の國は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔はむすとも長へに國は榮えむあな目出度あな目出度とて

櫻の木のいやつぎつぎにつたへきて
　御代のもとゐをながむけふかな

師岡千代子

年の内に月はあれども月の内に日はあれども二月の十あまり一日のけふはかり尊く愛たき日はあらすかしかくまくもかしこかれど二千五百五十六年のさきつ年大倭國橿原の大宮に天の下しろしめし天日嗣の高御座にのほりまして天壌とともに極なき皇基を建てたまひ國是を定め給ひし其日を朱日の祝日と定めまして殿に大御まつりせさせ給ふ今日の日にしあれば尊きあたりは朝とくより拜賀の馬車きしろ音たねず諸學校の團体等も其の式をなしてことほきまつり山里の奥までも日の御旗かゝげ業休みていはひ奉るなりけり況して今年は臺灣島の島人も大

御稜威に服ひまつりて天日嗣の御榮を祝ひ まつるなるへしと思ふにもいともかしこくもとも尊きは今日になんある己も疾く 起き出て衣更めて遙に橿原の宮の方を拜みまつり小床をは 祓へ清めて大御像の圖と御製伊勢の海の御歌とを掲げまつりて心ばかりの 神酒神饌をそなへうから集ひて御代を祝ひ今日の日をことほきまつりぬ

あはれ畝傍山の松風は萬代をうたひ埴安の 池のさゝなみは限りなき御代の數をや見するならんかしつゝしみて今日のほきことをかくなん

北村貞子

けふはかしこくも神武のみかどの御位に つかせたまひし日なりみかどははしめ日向のくにのたかちほに宮居を さだめたまひでまつりことをしきたまひしもまた恩澤にうるほはぬくにありしよりを ゝしくもみこたちと大みいくさをひきゐまして 日向のくにをたちたまひつひにしたがひなひかせて大和 のくにかしはらのみやにてはしめてみくらゐにつきたまひしよりかくも御ちすちのつゞきて とこしへにをさまりし御代とはなりしなりされは日の本 四千餘萬のはらからはみななりはひをやすみてこのありがたきみいつを祝ひたのしみてあふぐけふこそうれしきかぎりなれ

青木辰子

國も多きに此めでたき國に時も永きに 此うれしき御代に生れ出でゝ上には仁慈深き大君を戴き下には萬物豐かに 白波あさたねて草深き賤の伏屋も藻鹽たく海士のとまやも限りなき 御惠の露に潤はぬはてもなきこそ尊くもありがたけれそも此大御位は 其昔神武の帝築紫なる日向より大皇軍起させられ逆れる數々のあたを打ち平け給ひて 倭なる柏原に宮柱太しく立てゝ尊き御位にぞ即き給ひぬるあはれ 此日こそ二千五百五十あまり六とせの昔なるうれしき 今日なりけれ此後年經てし今に至ろまで一筋に神の御まご其位を繼がせ給ひて 一度も之れを奪ひ奉れる逆賊なく又知らぬ異國より侮りうけしためしもなし 殊に代々の帝よく心を政に要ひ給ひければ御徳にうるほはぬ 民草もなかりき降りて中の世に至りて時ならぬ浮雲の暫が程御光を 掩ひかくして世は荊棘の亂れに亂れ政事は皆刃とる武士の手に歸しぬ さるをかしこき 今上の帝の御位に即かせらるゝに及びて掩へる黑雲を 拂ひ給ひ萬の事皆かしこきほとりより出でぬる樣になりにしこそうれしとも 喜ばしけれかくて君にはひとへに民安かれと思し給ひて遠き 外國とも交を結ばせられ我の劣れるを捨てゝ彼の勝れるをとり充たぬ節もなく明らけき 政を敷かせ給ひければ之れを仰げる青草は夏の草木の露に逢へるが如くたゝへよろこびて君が大御代は千代萬代に天壤と 極りなからんとうたへるぞめでたき殊にはこぞの年大御軍は朝鮮を助けて 荒ぶる唐國を破りいと廣き土地をさへ加へぬあなうれしの今日やいで 己等も新しき同胞と限りなく目出たき今日を祝ひてまし

保元音羽子

元をわすれては末たゝずとはげにかしこき教へ とあけくれの思ひにつけ行につけていとゞ心おかるるものをましてねぞ 千島のはてより沖繩臺灣のくま迄も大君の御惠みにうるほふ 民草のいかでか國恩をわするべきと年々かはる身の上にかはらぬけふのことほぎを 萬世かけてねぎまつるは海の東西世の今古にためしなきわが國を はじめ給ひしみいつをかしこみまつる心ばせにこそわきて いぬる年一月の末よりして彼の國の兩の腕とたのみし要害を わがつはものたちの攻め入りて劉公島とやらの全くわが手におちしもこのごろにて わが廣島の土地はおそれ多くも大はたの駐まらせ玉ひしことゝて九重の 上つ方を始めひなの伏家の賤女妾たちまでけふのいく日をねらびて うれしき祝ひことしたるは

又あるましきさかりことにてけふこそは三千年の 昔この國のまれいでしに加へて一きはその光を世界にかゝやかしし 紀念日なれば今昔の感は筆にことばにつくすべきにあらずなん

高田ささ子

あめのした國といふくにのかずは あれどわがすめらみくにのごとくいともたふとくかしこきはさらにそのためしあるなき かゐもげにことわりなりや そもとほくあがれる御代をあふぎまつればかしこけれど神代のみあとうけさせたまひはつくにしら すすめらぎのみめぐみのつゆには四方の民くさうるほひそめみいつゝかぜには なびかぬものもあらずなりてかし原のみやの宮はしら高く ふとしくたてさせたまひいくよろづよもうごきなきもとゐを定めたまひたりけるこそ いとたふとけれされはあまつひつぎのたかみくらちりのくまもかゝらで いまに三千年はかりがほどみ光はいやまさりにまさりたみ草は いやしげりにしげりみよはいやさかにさかゐ大みいつは 世のことごとにかゞやきてこのありがたきおほみよとはなれりけりあはれかくださへも なきさちを得てかゝるめでたき大みよにあへるものたれかは そのかみをしのひまつらざらむたれかはちの大みいさをゝあふぎかしこみ 祝ひまつらざらむわきてことしは高砂じまの人々さへ みくにのたふときをしりそめてけふをもろともにことほぐやうになりけるを このみすゑわたつみのそこひもしらぬふかき海中に ちりひぢのつもりつもりてくもゐにそびゆる高嶺とならむまでのよをなほいくよろづ 重ねとも この大みいしすゑこの大御柱いかでかゆるぐ 時のあるべきやげにたふとしともたふとくかしこしともかしこくはたうれしともうれしくたのしともたのしや

松野みさを子

鄙も都の御空におさらず軒毎にたつる日の 御旗はうらうら昇る朝日子

の影に輝り清らに装しわらべたちの 學の舍の廣庭にうち群集ひて君が世は千代に八千代と言祝くも恐き 橿原の大宮にはつ國知ろしめしゝ其かみの昔をおもへば難波の浪べに仇海たちしも 大和國原の草木のさやきも皇御旗の下風に靡き和み 天津日嗣の高御座につかせ給ひしより今の御盛りの大御代まで年は過ぎ 世は隔てしも高く尊き大稜威は天地のむた長しへに天津日の大御光りと 同じく御隆に座せることをかしこみつゝしみわらはべたちと諸共に今日のよき日をことほき奉るになん

牧村ちよ子

軒にさす日影のうらゝかなる朝びらきに 戸毎になびける日の御旗のもとより清らに装ひしわらはべの群れたちて 學の舍の庭もせに集へるは今日は柏原の大宮に天地の有るらん 限り動なき皇御門の大御柱を築き立て初め玉ひしいとも尊き 神璽を仰ぎ奉り祝ひ奉る日とて年毎にこゝに集ひてかしこけれども昔ほぎ奉るに 海には浪風荒び立さわぎ野山には草木もさばへなしゝを大御つから 皇軍を率ゐまして拂ひ鎮め服従せ給ひて天津高御座を定め玉ひ千世萬代と 限りなく御榮ゐます今の此大御代に至りてもおのがじゝ學びの道の 明らけき大き惠をかゝふるをおもひまつれば皆これ傍畝の山の茂き御陰 によらざらめやもとわらはべたちにも昔ひつぎて共に今日の生日を謹て祝ぎ奉るになん

上柴絹子

雲に聳ゆる高千穂のとうなゐ子等の聲音うるはしう 樂しげにうたひ來るは今日の御祝の式はてゝ 學校よりのかへるさにやあるらむ折からうたけなる童の一人か

さつき校長さんの演説に今年は神武天皇の 御即位の年より二千五百五十六年に當つてそしていつの年よりも 御目出たい年であるなぜとなれば戰爭に勝つて日本の國が以前よりは 大きくなつたしかしまだ

是よりも大きくするのはあなたがたの　力であるから益々勉強しなさいつて僕は早く家にかへつてこの御話を　御父上さんにしなけりやならぬ

さいと樂しげにいま一人の童にかたりいでければ　我もさなりとて共々に勇みたちおの〳〵家路さしてゆきぬ

あはれたふときありがたき御代なるかな昔ならば　西東の方角すらわかちわぬほどのをさなきものが今は亞米利加は東にあり支那は西　にありなどのことはよくわきまふるに至れり

抑こはまたくこの大御代に生れいでゝ　惠の浪に浴せすはいかてかくやはあるかゝる末頼母しき若葉草のやかておひ立つ　春の時こそ吾が日本の御稜威はいよ〳〵四方に輝き明けく治まる大御代は　さきはかきはにいや榮ゆ千代萬代までも疑らざるべけれ

明治二十九年のうらゝかなる紀元節の日たふとき上代の　當時をあふききてはありがたき今代の有様をうれしみいさゝか見聞のまゝをかくなむ

寄山祝

たくひなきふじの高ねにたぐへつゝ
うこかぬ御代をいはふけふかな　　安井章子

仝

いにしへにかみのおもりし高千穂の
みねこそ御代のすがたなりけれ　　住山誠子

朝霞

あまのとのあけゆくそらに朝かすみ
たなひくやまも見ゆるころかな　　仝

若菜

をとめ子が袖ふりはへてきみがため
はひを野へにわか菜つむなり　　諏訪[illegible]子

梅始開

うくひすの鳴聲きかんとまとの戸を
あくれはかをるうめのはつはな　　仝

霞知春

山のははまたきのころしらゆきを
かすみへたてゝはるはきにけり　　彦坂尊子

夕鶯

のきけしなそのふの花のゆふはへに
得もいひしらぬうくひすのこゑ　　仝

子日

子の日するのへのこ松にひかれつゝ
わかみもともによろつよもかな　　仝

千草知春

なもしらぬ草さへ野邊にもえ出てゝ
はるのけしきになりにけるかな　　平澤ふさ子

簾外梅

おぼろよの月にかかけしたかとのの
をすのとかよふうめのしたかせ　　吉川禮子

夜霞

闇夜にもそれとしられてをちこちの
まともる火かけうちかすみつゝ　　勝部しう子

氷初結

津田德子

ひさむらの塵あゐかたをたよりにて
むすひそめたるいけのうすらひ　静岡　密子

冬里

やま風に木の葉もちりてふゆの夜の
なかめくまなきつきよしのさと　田村家壽子

鴉

その親にはくゝみかへすやまからす
にはのをしへは誰れにうけゝむ　小町谷　里江子

嗣信忠信の妻のかたに

手弱女のよろひのそてのうるはしく
こゝろのはなは世にかをるなり　仝

初鹿野源五郎妻

初鹿野のつゆさきはなんたまのをゝ
むすひてかをるをみなへしかな

三月兼題

五日
歌……歸雁
文……野遊

廿日
歌……硯
文……養蠶を勸む

●きこえまゐらす

一原稿はすべて、書きざま正しかるべし、文字のみだれたる、住所姓名のもれたるはとらず。

一兼題歌文は、ことに變体がなを用ひず、一字々々分明にしるさるべきこと、又歌一首の上に、上の句の中に二ところの漢字一字を用ひ他はみなかなを用ゐるべし。

一必ず半紙を用ひて十六行、二十四字詰なるべきこと。

一毎紙、國郡、町村、番地、姓名等つむらかにしるさるべきこと。

一五日兼題は前月廿五日二十日のは、その月の十日までに本社にとゞくやう御送りのこと、遲れたるはとらず。

の君のむこ君と言にたへたり。かゝる君にふた心なくかしづかれ給れと姫の御幸、后に立給はんにもまさるべし。出入し給はんをみむ、千とせのよはひのひぬべしと、目口もはたかりかほのはゝゆかむもれもはえす、ときめきたるは聞にくきまで、れはえ、みけ殿はまして目もあやに詠給て、かかる男をよろに見む手にすゑとる妻をろらいたらむ心ちせん、我はれはくのむこよめのあつかひしぬれど、今宵むかりうれしき事なしとて、かはらけ度々初給て、猫共にも酒すゝめゑひみだれ、父藏人もあまた度めぐるさかづきにゑひて、うろぶきひやうし取て、戸むりこもたてたるになどうたへむ我おとらじと此御さかなに何よけん、とはな聲にうたふもめでたし。夜もはの〳〵と明方にれの〳〵歸ける。ほど〳〵に付てれくり物もいとあらまほしくしたり。此後は花もみぢによせて、行あつまりめてたき中らひ共也。心行はなやかにて年も暮ぬ。

あくる夏の頃かとよ、のら猫と言くせ物出來て、ねこの子人のらうたくし給すゝめやうの物まで取、あたりちかき猫共は、ぬれ衣をはしかねたり。はては上の御鳥籠に行て、もろこしより奉りたる御鳥を取たり。人々れひ給へど、やゝと言べき

程もなく、御殿の上に行くひころし侍ける。是によりはやわざ一もつのことに、男猫は御鳥のため、うしろめたしとて、思ひ〳〵に里にれろし給ひ、よも太も其内にもれず行に、れと君の別おはれと言もおろか也。此頃たゞならずさへわりけれど、かゞ見をみてもなぐさめてましと、の給し人にもこよなうまさりたる。其頃たかたと言里に世をいとふひじりれはしける。昔しりたるよしわれど、是へゆかんとて出立に、涙の雨に行さきもればねず、たゞかりろめの物まうでのやうにて行ぬ。ひじり御らんじて、いとうつくしき猫かな、我れこなひの隙のなぐさみにせむとていみじういたはり給。よもは古郷の事のみ戀しくて、佛のれまへに參て、いかにもして戀しき事の物忘して、佛道に入給と祈ける。うち忘をれたるさまをひじりみ給て、わはれがり給て、などてかくいつとなく物むづかしげなるぞ、外に出て門田の面をれみよかし、むかひのろのにはまたゝびのはやくも有など、心につくべき事のみ言きかせ給。少いざり出てみれどなぐさむべうもなし。ひじりのかく情ふかくの給ふに付ても、をさなくよりなでやしなひ給し人のかうべもいと戀しう思ひ出れど、かくつぶやく、

君にまたたび〳〵あふる身なりせば
物くさくとも行てたをらむ

住まくに人のなさけもしりぬれど
猶は忘れぬは昔成けり

なきへよりやごとなき、僧たちまうで來て、此主のひじりとありがたき法文し給ふ。よも太も是を聞、夢まぼろしの世中にめしかへされ、妻子をみんに付ても、いよ〳〵世のいとなみに心入ぬべし、いかゞもして此度ちくしやう道をまぬがれ、佛道に入むやとおもひて、しやうじんけつさいして、佛の御名をとなへけり。ひじり此色を御覧じ、あなふしぎや、よも太郎はさしも一もつ成しが、ねずみ鳥つむさにも心とめず、又うをゝも絶てしよくせず、ありしよりげに心もかろく成て、佛前にのみかしこまりをる、ちくるいとても佛道に入ためし昔よりたぐひおほし、いかさまにもなんぢ道心有やとの給へば、よも太郎うれしげに御ひざにむつれければ、ひじり大にかんじ給て、有がたき法文をさづけ御衣の袖うちきせ、かうけりあてゝ法名を付、此これよりして不昧離畜入道とぞよばれける。此文宗の心我ねがひのやうなれば、

度ちく類をのがれん事うたがひなくおぼえて、ずゐきのなみだをながしける。あかの水に月影のさし入たるをみて、ちゝ入道

　もろ友に心の水のきよければ
　　くまなく照す有明の月

年月にそへおこなひのこうつもりて、にくかりしのらもなく、恋しと思ふおと姫の面影も、いつしか忘にけり。おと姫は秋も暮行まゝに、入道のうゑおきたるせんざいの草木ども、おのがまゝにみだれたるもあはれ成。

　よもにうゑし草木はのらとあれはてゝ
　　君まつ虫の音をのみぞ鳴

よも太郎に別侍し時たゞならずみえしが、たひらかに男をうみ、世にうつくしきさまなれど、入道の昔ながらにておはしなど、諸友にかしづかましと思出ぬ日なし。やがて君へめされかうぶり給ひてかつきすべき子也とて青葉とめす。よもはゝんにたぐへられし花のかたみなれどもとて、かく名付させ給。おと君

みるからにいとゞあはれはふかみ草
　　ありて散にし花のかたみは
みのき聞て若君なべてならねど、若君にはこよなうれとり給つる物をとて、
　　をしまれて散し名殘のふかみ草
　　　　なはしたはるゝ花の面影

かうころいはまはしけれとて笑。青葉かたちより初、世にすぐれたる事、御門きこしめして御前にさふらふ御猫のすぐれてかしづくむすめを青葉にくだし給いとよく思ひかはしたる、姫君あてにうつくしけれど、れとはうつくしき物ねたりと松の君とよめの君をもてなし侍る。れと姫はかくさかね、よもはばだいの道に入、ふうふ取〴〵なる幸うらやまぬ猫はなし。青葉がたゞ今の北方は、内の御猫の姫君也。一かくやごとなきぬしつよくさだまりながら、色好のくせにや、みやづかへ猫かしづきむすめ共大方みぬはなし。此比世にならぶ猫はなし。よもの後のすき物也。かたしをなけれど、光源氏雲がくれの後、かをる大將もかくやとれもひ侍る。此すゑいか斗りひつすらん。若御身なれど身づから見聞給へとて、夜のはのゞとわけ方に、猫

はわかれ〳〵に成にけり。聞人いとめづらしく思ひけるとぞ。

猫を手ならしもてあそぶる丶事にて、寛平の先帝よりさいらせられしを愛し給御消息などか丶せ給しかど、かしこまりてうけ給ぬるけしきはけるよしを、御記にしるし給ふなる。一條院の御ねこはうふやしなひの儀式など、御ところ〴〵よりたてまつられしとぞ。今此物語をみしに、げにいとかしこき寵をゑしことは、いにしへのあとには心たとりやはさむ。あまねき御めぐみのかげにかくれ、くもりなく光にてらされてこそあやまちあらんことをおそれつ丶しめ。そらにせく丶まり、地にぬきあしすといふなることわりをしり、つひにれんりゐとの上なき心ざしをさへさとりてや。離畜とはめされけむ。延喜の御徳にはとりすらもしたがひたてまつりしためしに、立かへりぬる時をめで丶、むさしの丶ゆくすゑとはき萬代をたのしむあまりにみやこ鳥のあとはかなきはらをわすれて、いさ丶かとくをそへ侍るものならし。

すけ慶

この物語をかゝせたまへる道晃親王は人皇第百七代にあたらせ給へる後陽成天皇の皇子におはしまして　第百八代後水尾天皇の御弟にませり。御母は三位の局古市播磨守胤榮の御女にておはす。はじめは聖護院におはしゝが、後に照高院にうつらせたまひ、延寶七年六月十八日迁化したまへり。奥書は烏丸光廣卿の孫大納言資慶卿のものせるなり。

明治二十九年二月二十日　　編者識

詠梅歌

加茂眞淵

かけまくもゆゝしきかも　いはまくもあやにかしこき
天地のおほへろ中に　國はしもさはにあれども
日のもさの神の御國は　天津神のみこさもで
天地のなり出ろはしめ　父母の神の命の
生ませろ國中にさほり　あまてらす日ろめの命
あまつなは志ろしめしゝゆ　あれましゝ神のみこさの
櫻の木のいやつき〳〵に　あめのした志ろしめしつゝ
天地のなしのまに〳〵　久かたの天の益人
あまさはすのりわけ給ひ　なてたまひ治めたまへは
すめろきのみこさかしこみ　おのかしゝおのかほさ〳〵

守らへて志かれかひなく
はろへには花折かさし
うらもなく遊はへなれは
うらやすの鬮さたゝへて
風のさのさほきくにゆも
志か名をはうめさたゝへて
志つのをもたふさみぬれは
みやひたろ花さわれもひ
よしゑやし空さゆろさも
いさましき心ふりおこし
さきたちて咲出てなれは
下枝なは人さりからし
さかしらに花も咲ぬれ
舟こそはたゆたひゆがめ
こち〱にさころさためす
馬自物縄さりつけて
みきにはきみつ枝なきられ
よしのなきかも

むらきもの心たらひに
秋立はもみぢ葉かさし
神代よりこさあけぬ鬮
事もなくもなきくにから
なく子なす志たひしくれは
うま人もめくしやさしみ
鬮さかのかさある木たち
おこらひてはろさりくれは
よしゑやし雪はふろさも
おくれしさこさ木の花に
もゝちさり木すゑゐからし
かさしつゝうめてふ木こそ
かくはしきにほひ有さて
ほさもなき庭にれこされ
牛こそは鼻縄はくれ
こち〱の枝なさゝめて
天地にいほゐさすへき

女鑑第百三號目錄

女鑑
女子と衛生……………………雨後翠江

論說
家庭敎育の急要を論して廣く日本臣民たる女子に希望す……………………雨後翠江
女子敎育一班……（十二）……………………三輪田眞佐子

史談
熊野御前……………………鹽井ふく子
三輪女……………………山川清素

家政
たちぬひ……………………西山たい子
このころ……………………鋤柄義子

學園
日本文典（四）……………………鹽井正男
はてはつき……………………永石德文

漫錄
おきの玉藻（五）……………………永石德文
伊勢萬歲……………………井上賴文
げにさおもへば……………………三輪田眞佐子
井蛙小錄……………………井上賴文
待乳山の雪……………………草の屋主人
冬の休暇……………………千稻
野寺の墓……………………石摶千亦
時雨（三）……………………白魚女史

文林
歌數百首　文數章

雜報
●皇太后陛下の御誕辰●皇太子殿下の御仁愛●兩皇女殿下●豫撰歌●物部神社●豐公誕辰祭●袈裟御前の塚●學生の腕力●學齡兒童の齒及口腔の攝生●東京盲啞學校生徒失官の原因●全國中の產婆數●喫烟の害●瀛車の速力●中佐墓畔紅淚多し●婦人慈善會●貞婦●外國語の轉訛

敎の庭
兼題　歌數百首　文數章　他數々

附錄
りちく物語…（つゝき）……………………道晃親王著
口繪……………………永峰秀湖
挿畫……………………高橋松亭

（明治二十四年八月八日内務省許可）
（明治廿五年三月十二日遞信省認可）

社告

〇代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事〇郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事〇郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事〇別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事〇未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價			廣告料
一冊	六冊（三ヶ月分）	十二冊（半年分）	五號活字廿三字詰一行金二十錢
十錢	五十五錢	壹圓	
全國無遞送料			

明治二十九年二月十九日印刷
同　年二月二十日發行

發行兼印刷人　東京京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
編輯人　同　山根勇藏
發行所　同　（電話番號一九四六）　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）